
先輩なんて大嫌い。

0 . 5 %

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩なんて大嫌い。

【Nコード】

N8386T

【作者名】

0.5%

【あらすじ】

「俺、お前のこと嫌いだわぁ」

私は、櫛先輩が苦手だ。だから、先輩にそんなことを言われても、全然気にしなかった。ただ気になるのは、どうして先輩が、私の近くにくるようになったのかだけだった。

自分の思っていることを言えない弱虫少女と、何事にも物怖じしない少年の、不器用な恋愛ストーリー。

「私だって、先輩のこと嫌いですよ」
そう言えれば、私は、どんなに楽しんだろう。

01・私

「あ、三神さん」

「はっ、はいっ」

「これ、教室に持っていつてくれる？」

「え、あ、その……、」

「アタシ、用事があるの！　お願い！」

「……………うん、いいよ……………」

「ありがと！　よろしくね！」

いつもそう。

人に反抗できなくて、言いなりになって。自分の意見も言えなくて。

そんな私のことを、みんな、都合のいいように使っているんだろう。

そんなの、本当のところ嫌だ。私だって、好きなことをしたいし、言いなりになんかなりたくない。

でも、私は人に反抗できない。だから、言われたことをするしかないんだ。

こんな人形みたいなこと、したくないのに。

今年の春に高校生になった私、三神^{みかみ} 慧^{けい}は、中学校の頃とあまり変わりの無い生活を送っていた。変わったことと言えば、たくさんの学校から人が来てるため、あまり知人がいないことぐらいだ。

入学したては、みんな、友達をつくるために、人気になるために、

焦るだろう。どうにかして自分の信頼を寄せよう。そういう思いがあるのだろう。

しかし、私はそんなこと、どうでもよかった。幼稚園のときからずっと、私には友達があまりいなかった。いても、5本の指が埋まるか埋まらないかという数。

もともと、私は臆病で人見知りが激しい。友達が少ないのは、そのせいもある。話すのも苦手だし、自分の意見も言うことができない。その上、泣き虫で、弱虫で、怖がり。周りにはいつも迷惑をかけてしまう。

そんな性格のせい、私はよくパシられる。

先生に頼まれた仕事を無理矢理押し付けられたり、荷物持ちをさせられたり。

自分の意見を言うことができない私を、周りの子は、いいように使っている。

本当は、私だって、好きなことをしたい。パシリなんて嫌だ。自分でやれって言いたい。それが言えてれば苦労はしてないんだけど、でも、反抗するのが怖い。自分の意見を言うのが怖い。人に何か言われたらどうしよう。

こんなことを考えてしまっ、結局、私は言いなりになってしまっ。

私は、そんな自分が嫌いで堪らなかった。

そんなある日のこと。私は、いつもどおり、人に仕事を頼まれ、廊下を歩いていて。

廊下の窓際には、女子たちが数人固まって、何かを話していた。そんなことには興味はない。

そう思いながら擦れ違ったとき、私の耳に、会話の一部が入ってきた。

「この前のバスケの試合、見た？」

「うん、見た見たっ」

「櫛先輩、超カッコよかったよね!!」

「ねーっ！ 私、先輩に惚れ直しちゃったあつ」

「先輩、彼女とかいないよねー？」

「えー、いないでしょ

……………」

櫛先輩の話か……。先輩人気だな……。

あの子たちが言っていたのは、校内で一番人気がある櫛くぬぎ 瑞紀みずき先輩のことだった。

櫛先輩は、二年生でバスケット部だ。容姿端麗、眉目秀麗、そんな言葉たちを擬人化したような人だ。ざつくばらんな性格で、何事にも物怖じしない。誰にでも自然な感じで接することができる人。言葉遣いが悪いらしいけど、そこがまたいいとか。とにかく、櫛先輩はモテる。男子にも女子にも。

え、私はどうかって？

……………正直言うと、私は櫛先輩に興味はない。というか、櫛先輩は私の苦手なタイプの人だった。だから、話そうとも思わないし、好きとも思わない。

それに、先輩は私とかけ離れたところにいる人だ。私には直接関係のない人だから、どうも思わない。

さ、早くしないと休み時間が終わっちゃう。急がないと……………っ。

この後、私と櫛先輩が関わることになるなんて、このときの私は思いもしなかった。

01・私（後書き）

どーもっ。 にじファンのほうで小説を書いてる0.5%でーす！
さて、今回は純恋愛ストーリーを書くことになりましたがー……………。
もうすでに辛いorz
だって、NLとかむずい！！ 大変！！
こんな感じですが、頑張ってみようと思います……………。

02・『俺、お前のこと嫌いだわあ』

「三神さん」

次は移動教室だなあ。早くしなくちゃ。

そう思っただけが教科書を持って廊下に出ると、同じクラスの斉藤梨花さんが近寄ってきた。

この人は、しょっちゅう私を使う人だ。私は、この人が大嫌いだった。

どこか気取っていて、自分が中心にいないと嫌で、人のことを馬鹿にした感じがしているから。

「……………なんですか……？」

そんなことを考えつつ、それはおくびに出さないようにしながら返事をする。この声は、私のことを使おうとしているときの声だ。斉藤さんは、私の考えていることも知らずに、私に顔を近づけてくる。

「ねえ、これ、持っていてくれない？ あたし、重いもの持てないのぉ」

何が重いものだ。今普通に持つてるじゃないの。

私はそう思った。

でも、私がそんなこと言えるはずもなく。

「え、あの、その、っ」

「ねっ、お願い！！ あたしたち、友達でしょ？」

誰も友達になった覚えはありませんよ。

そう言いたいのに。

どうして、言葉が出てくれないの……………っ！！

今日も、私は人にいいように使われるんだ。反抗できないから。

「ねえ、やってくれないの？」

「う、その、あ、」

「やってくれるわよね？」

何も言えずにうつらたえている私を見て、斉藤さんが笑いながら迫ってきた。

もう、やだ……………っ。

視界が霞む。ああ、また泣くのか、私。泣き虫だなあ。なんだよ、私。

泣きたくなんかないのに、涙は私の言うことを聞いてくれないで、出ようとする。外へと、零れようとする。

やめてよ。やめて。

「も、やめて……………っ、」

「おい」

「え？」

「ふえ……………、？」

私の涙が一粒零れたとき、声がした。聞き慣れない、聞いたことのある声。

顔を上げると、そこには、

「くっ、^{くろくろ} 梶先輩っ！」

梶先輩が、斉藤さんの肩を掴んでいた。

「せ、先輩、なんでいるんですか？」

「そりや学校だし、俺がどこにいてもおかしくねえだろ」

「そうですけど……………」

突然のことに、私は声が出なかった。

どうして先輩がいるの。

なんで……………？

「お前さ、自分の教科書ぐらい、自分で持てよ」

「え、これは、そのっ、三神さんが自分からやってくれてっ」

「ふーん……。じゃあ、なんでそいつ泣いてんだよ」

「えっ？」

先輩が私のほうを見て言う。驚いた斉藤さんがこっちを向く。

「お前、なんで泣いてんだよ」

「え、その、……………」

私が本当のことを言えずに黙っていると、斉藤さんが教科書を持って行ってしまった。

そのときに、私を睨んだ斉藤さんが怖くて、また泣きそうになっ
てしまった。

「おい」

俯いて泣きべそをかいてる私に、先輩が話しかけてきた。

この人は、苦手だ。身に纏っている雰囲気とか、私の大嫌いなやつだ。

そう思っていると。

「お前、なんで自分の思ってること言わねえんだよ」

先輩が、私に言ってきた。

一瞬、息をのんだ。

見られてた。

あそこを、見ていたんだ。この人は。

私は、頭が真っ白になって、何も言えなかった。

そんな私を見て、先輩が溜息を吐く。そんなことさえ怖くて、私は肩を縮めた。

と。

「はあ……。あのさー、」

先輩が口を開いた。私は、静かに顔をあげてそちらを見る。

何か、言われるんだろうか。

怖くて唇を噛んでいると。

「俺、お前のこと嫌いだわあ」

予想もしなかった。
先輩に、そんなことを言われるなんて。

03・弱虫

「俺、お前のこと嫌いだわあ」

校内一の人気者の先輩に初めて言われた言葉は、その一言だった。人に嫌われるのは、嫌だ。でもそれは、嫌いでも好きでもない人のみのこと。

私は今、初めて、率直に「嫌い」と言われた。真正面から、剛速球で。

前も言っただように、私はこの人が苦手だ。もしかしたら、嫌いなのもかもしれない。そんなあやふやな位置に、先輩はいた。

そんな嫌いな人に「嫌い」と言われても、なんとも思わないだろう。少なくとも、私はそうだ。

何か、言い返したかった。

でも、思っていることが言葉になって出てこない。いつもと同じ。何もできなくて、私は、俯いた。

そんな私を見て、先輩は溜息を吐く。それが怖かった。

先輩はきつと、私をおいてどこかへ行くだろう。ていうか、行っただけほしい。今すぐに。私の心臓が限界だ。膝だって、さっきから震えている。

そんなことを考えていると。

「お前さー……………」

「っ、！」

先輩が私の顔を掴んで、強引に前を向かせた。先輩の力が強くて、掴まれている部分が痛い。でも、今はそんなのどうでもいい。私は今、恐怖で動けないでいた。みんな、笑うだろう。こんなことで動けなくなるなんて。別に、笑われてもいい。怖いものは怖いのだか

ら。頑張らなければ、克服できないものだってある。

視界が霞んでいく。止まった涙が、また出てきそう。

しかし、そんな私にかまわず、先輩は私の顔を掴んだまま、見つめてくる。

どうにもできなくて、私は、必死に先輩から目を逸らした。そう、熊と遭遇したときのように。

怖い…………っ！

そう思っていると、先輩が、やっと口を開いた。

「なんで自分の思ってること言わねえんだよ」

こう言われると、わかっていた。だいたい、予想はつく。

さっきのような場面に出くわしたとき、半分の人は「虐めか」、もう半分の人は「自分の考えが言えないのだろう」と思うだろう。

これがあるているかはわからないけど。

私の予想では、先輩は絶対に、後者だった。何があるうと、絶対に。

だから、言われることはわかっていた。

でも、実際に言われると、感覚が違った。それも、全然。

この質問に、私はどう答えればいいのだろう。それ以前に、答える勇気が、私にはない。

ずっと黙っている私を見て、先輩は、諦めたような顔をした。答ええない、とわかったのだろうか？

顔から手が離れて、私は少し安心する。あの妙な緊張感から、少しだけ放された。

「俺、お前みたいな奴が一番嫌いなんだよな」

先輩が、急にこんなことを言い出した。

「……………」

「お前みたいな弱虫が、大嫌いなんだよ」

「……っ、」

先輩の言葉に、カチンときた。本当は、殴ってやりたい。それくらい、私は悔しかった。

でも、本当のことだからしょうがない。手は出せない。ぎゅっと、拳を握って俯いた。

「こう言われたって、言い返せねえ。なんなんだよ、お前」
「……………」

「普通なら、本当のことでも何か言い返すと思うぞ」

そうとだけ言って、先輩はどこかに行った。

緊張の糸が切れて、強張っていた筋肉が緩む。そのせいで、私はその場にへたれこんでしまった。

上手く動かない頭で、さっきの先輩の言葉を思い出す。

『弱虫が大嫌いなんだよ』

そう、私は弱虫だ。何も言い返せない。自分の考えが言えない。すぐに泣いて、怖くなる。

誰よりも弱虫だ。

『大嫌い』

嫌いな人に言われたのに、胸が痛むのはどうして？

04・ある日の放課後のこと

『大嫌い』

梶先輩へんせいにそう言われてから、数日経った。

私は、あの日から何かがおかしかった。

気づくと先輩のことを考えていて、先輩を見ると、なぜ胸が痛くなる。どれもこれも、先輩絡みにことだ。

それでもやっぱり弱気なことには全く変わりなくて、パシられてばかりだ。でも、先輩のことがあってから、前よりパシリの数が少なくなつた。それと同時に、少し、周りの視線が冷たくなつた。

私は、パシリの回数が少なくなつたことなんて、全然嬉しくなかつた。周りの視線が、辛くなつただけだつた。

だから、先輩のことがさらに嫌いになつた。

私から、どんどん人が離れていく。私は何もしていないのに。

どうして私を責めてくるの？

どうして私から離れていくの？

私が先輩に助けてもらつてから、私は、今までになかつた嫌がらせを受けるようになった。それも、かなり陰湿なものだつた。

仕事を更に押し付けてくるようになったし、わざとぶつかつてきたのに「謝れ」と言われて謝らせられたり。

自分の意見が言えない私は、相手にとって、格好の的だつた。先生に言いつけることもない。反抗もしてこない。虐めるにはうつつけ。

私は、泣くだけで何もできなかった。ただ、泣いてうずくまるだ

け。先生に言えば、更に酷くなる。それが、とても怖かった。

いじめは、体に痕が残らないようなものばかりだった。なぜ人は、こういうところで知恵がはたらくのだろうか。

隠された靴を探しながら私は、そんなことをぼんやりと思っていた。

靴は、二足ともなかった。きっと、一足ずつ別々のところに隠してあるのだろう。今は放課後だから、校内に人は少ない。だから、探していても見つからないだろう。

もしなかったら、靴下で帰ろうか。それとも、上履きのまま帰ろうか。見栄えは悪いが、上履きを履いて帰ったほうがいいだろう。そうすれば、足の裏は汚れない。そうだ。そうしよう。

そう思いながら、図書室の中を探し回っていると、本が落ちていた。これは、拾ったほうがいいだろう。

私は、その本を拾うために、そのまま前屈みになった。

「っ、おい！」

急に肩を掴まれて、上半身を起こされる。突然のできごとにびつくりして、私は声を上げそうになる。けどそれは、後ろから出てきた手によって出ることはなかった。

「んんっ！ んーっ！ー！！！」

強く押し付けられて息ができず、私は、恐怖も忘れて手を叩いた。誰！？

「静かにしろ！ 図書室だぞ！」

もがいていると、耳元で、聞いたことのある声がした。小声だけど、必死な感じがとても伝わるような声だ。

その言葉に、私はハツとした。

そうだ。ここは図書室だ。静かにしないと。

私が落ち着くと、後ろの人は、「出るぞ」と言って、私の手を引

いた。

「はぁ……。ヒヤヒヤしたぜ……………」

図書室から出て、私の後ろにいた人の正体がやっとなかった。

「く、梶先輩……………」

そう。

私の大嫌いな、梶先輩だった。

「な、なんで……………」

「お前はなぁ……………」

私の言葉をさえぎって、先輩が溜息交じりに何かを言い始めた。
なんだろう、と思って、先輩の様子を見てみると、頭を小突かれた。

「いたっ」

「なんつー格好をしてんだよ！ 馬鹿かお前は！」

急にそんなことを言われても、困るんだけど……………。

私は、何がなんなのか状況が把握できないでいた。

そんな私を見て、先輩がまた溜息を吐く。

「お前なぁ…………。後少してパンツ丸見えだったぞ」

「……………っ、！?!?!?」

先輩の口から出た言葉を理解するのに、私は、数十秒かった。

理解した途端、顔が一気に熱くなった。きっと、私の顔は真っ赤

だろう。

「だから、完全に見える前に」

「……………見たんですか……………」

「あ？……………まあ、その、少しな…………。てか、見えただけでっ、」

「……………」

「……………？ おい、どうし」

「最低です……………っ」

「なっ、」

私はそうとだけ言って、その場から走り去った。
見られた。大嫌いな先輩に見られた。最悪だ。
恥ずかしさと悔しさで、涙が出てきた。

もう、あの人の顔を見たくない。
本気でそう思った。

「……………なんで俺が泣かしたみたいになってんだよ……」
その場に残された少年は、そう言って、小さく舌打ちをした。

05・名前を知らない優しい先輩

梶先輩くさねに下着を見られた。最悪だ。先輩は親切のつもりかもしれないが、私にとっては、大きなお世話だった。梶先輩に見られるくらいなら、他の人に見られたほうがまだよかった。

あの場にいるのが堪らなくなった私は、あそこから走って逃げ出した。

やっと逃げられた……。

そう思ったとき、私は、重要なことを思い出した。

靴！

そうだ。私は靴を探していたんだ。あんなことがあったせいで、すっかり忘れていた。

どうしよう。靴を探さなければ、上履きで帰ることになる。私は別にかまわないけど、親がびっくりするだろう。やっぱり、探して帰らなければ。

溜息をついて、廊下を振り返る。

今戻っていったら、先輩と遭遇してしまうだろう。それは、なんとしても避けたい。あんなことがあったばかりだから、それは先輩も同じだろうけど。

しょうがない。1階から探していくしかない。

もう一度溜息をついて、前に向き直ったとき。

「あ、いたいた」

向かいから来た誰かと目が合った。目が合った人は、一言、そう

零す。

誰だろうか。あまり見かけない人で、私は普段より警戒心を強める。内心、かなりおどおどしている。それが表に出ないように、私は必死だった。

そんな私に、その人は近寄ってきた。上履きの色からして、先輩だった。それも、櫛先輩と同じ学年だ。

最悪だ。先輩は、ただでさえ苦手なのに。あまり見かけない人なんて。

泣きそうだ。どうしよう。

きつと涙目だ。そう思った私は、俯いた。

「なあ、この靴、お前のだよな？」

先輩は、そう言いながら私の靴を差し出してきた。それにビックリして、思わず顔を上げてしまった。

「う、な、なんで、わたしの……………、っ」

「これ、俺の教室のゴミ箱に入ってたんだよ」

その言葉に、ああ、やっぱりと思ってしまった。

先輩が差し出した靴を受け取るために手を伸ばすと。

「なあ、なんか辛いことでもあったか？」

先輩が聞いてきた。急になんだろう。そう思ったとき。

「泣いてるぞ」

そう言って、先輩が指で私の涙をすくった。

少しビックリした後退あとずさってしまった。

マズイ、怒られるかもしれない。どうしよう。

そう思っでぎゅっと目を瞑ると。

「ああ、ごめん。ビックリしたよな。ごめん、ごめん」

先輩は、私の頭を撫でてきた。

今までにないパターンに、私はきょとんとして、先輩の顔を凝視してしまった。

そんな私を見て、先輩は「どうした？」と笑って聞いてきた。

顔が熱くなる。

鼓動が早くなる。

こんな感覚は、初めてだった。

なんだろう、これは。いつもの、緊張とかとは違う何か。

初めての感覚に混乱していると、先輩が私に話しかけてきた。

「三神 慧だよな、お前」

「えっ、あ、はっ、はい、そうです……っ、」

なんででしょう……、そう問うと先輩は、「いや、とくに何も」と、何か濁したような言い方で答えた。

なんだろう？

というか、先輩はどうして私の名前を知っているんだろう？

そういえば、この先輩はなんていう名前なんだろう？

ひとつの疑問がどんどん膨らんでいく。私はどうすればいいんだろう。

軽くパニックになっていると、先輩が口を開いた。

「俺でよかったら、いつでも相談にのってやるからさ」

そう言いながら先輩は、私の頭に手をおいて微笑んだ。

「一人で抱え込むなよな」

名前も知らない先輩に

胸が高鳴る

この気持ちはなんですか？

親切な先輩は、帰り際に、笑いながら私に手を振ってくれた。

06・刹那

親切な先輩に会った翌日。私、三神 慧は、いつもの如く、パシリをさせられていた。今回のパシリは、授業で使う大量の資料を教室へ持つて行くものだった。職員室から教室までは、結構な距離があるため、大量の資料はキツかった。

でも私、は自分の気持ちを人に言えない。いつものように、押し付けられて、何も言えなかった。すれ違う人たちは、私に見向きもしないで通っていく。まるで、私がそこにいないかのように、自然に。

『手伝って』

そう言いたいとは思っている。でも、言えないのだ。

いつ資料を落とすか、ヒヤヒヤしながら私は階段をのぼっていた。そんなとき、何人かの先輩たちが下ってきた。私は、道を開けようと横に避けようとした。

刹那。

「あ……っ」

階段から、後ろに落っこちた。

人間というものは、自分の身に危険が迫ったとき、いつもより時間の過ぎ方が遅くなるらしい。スパースローで映像を見ているような、そんな感覚。

私は、今まさに、その状態だった。

資料が落ちてくる

先輩たちはあっけにとられている

足が階段から離れていく

宙に浮いた状態で、私はゆっくりと目をつむって思う。

『どうして、こうなっちゃったのかな』

そのまま私は、意識を手放した。

休み時間。俺は最高にイラついていた。

そう。アイツ、三神 慧のせいだ。

昨日、俺は図書室で、アイツの、……………、し、下着を見てしまった。

別に、俺が見たくて見たわけではない。たまたま見えてしまっただけだ。アイツの下着を見るなんて、こっちから狙い下げだつっの。

それなのに、アイツは泣いて帰っちまった。

まるで俺が泣かせたみたいになって、本当に気分が悪かった。気分が悪いのは、今もなのだが。

そんな俺に、誰かが近寄ってきた。誰だ。今の俺に近づくなんつー、自殺行為をする奴は。蹴り殺すぞ。そう思っでガンくれてやると、見慣れた顔が、いつもと同じ調子で言葉を零した。

「おいおい瑞紀。いきなりガンとばしてくるたあ、なんだよ。俺がなんかしたってか？」

「…なんだ、テメエか。高峰」

俺に近寄ってきたのは、幼馴染の高峰^{たかみね} 響平^{きょうへい}だった。

コイツは、昔から俺の一番の親友であり、大切な幼馴染だ。

「おいおい、いつも言ってるじゃねえか。苗字で呼ぶなってさー」

「うるせえよ。高峰は高峰なんだから高峰でいいだろ」

「高峰つて連呼すんなよ。なんか違和感あるからやめろ。きょうちやんでいいからよ」

「それは絶対に嫌だな」

「え、なんでだよ」

高峰はこういう面白い奴だから、友達が多い。俺に友達が少ないというワケじゃない。高峰は、他の学年や女子、教師たちとも普通に親しいのだ。

一緒にいて楽しい。そう思えるヤツが一人でもいるといいと、俺は思う。なんでも言える。そんなヤツ。

アイツは、そういうヤツがいないのだろう。普段の行動を見てみると、いかにも、『私には友達がいません』ってオーラが出ているのだ。一人で寂しいヤツ。

俺は、そういう弱虫が大嫌いだ。

自分の考えが言えないで、うじうじしていて。見ていてもどかしい上、付き合にくいのだ。俺は、高峰みたいなさっぱりしたヤツが好きだ。

そう思っていると、高峰が何かを思い出したように、口を開いた。

「そうだ、そうだ。昨日さ、三神と話したぞ」

「……………マジかよ」

「おう」

今、飲み物を飲んでいたら、絶対に嘔き出していただろう。

なんで高峰とアイツが話したんだ？

「お前、アイツになんか用があつたのか……………？」

「ん？ ああ、まーな。昨日、教室のゴミ箱に三神の靴が入ってたさ。探してるだろうなーって思って、届けようとしたんだよ。そしたらさ、俺の向かいから三神が、来たんだよ。なんか知らねえけど、三神、泣いてたんだよな」

「うつ」

高峰の言葉に、俺はギクツとする。思わず、短い嗚咽のような声が洩れてしまった。

「？ どうした瑞紀？」

「い、いや……………なんでもねえ……………」

「……………おい、瑞紀。顔が引きつってるぞ。お前、なんか知ってるだろ」

サイアクだ。

「昨日、三神となんかあっただろ」

「し、知らねえよ……」

シラを切るつもりが、墓穴を掘ってしまった。

高峰が俺に問い詰めてきて、もう逃げ切れないと思った、そのとき。

「一年生の女子が階段から落ちたぞ!!」

うちのクラスの奴が、大声で言った。

その言葉に、教室は一瞬静まり、次の瞬間には、色々な声が溢れ出した。

「落ちたって……、高いところだったらマズくねえか？」

「ああ。後ろからだったら、尚更だな」

しかし、誰だソイツは。

そんな俺の考えを察したのか、高峰が大声を出しながら入ってきた奴に聞いた。

「おい、それ誰だ？」

その問いに、ソイツは首を傾げた。
が。

「一年三組、三神 慧よ」

教室の後ろのほうから、聞き取りやすい通った声がした。

全員、一斉にそちらを向く。

そこには、ロッカーの上に足を組んで座った、一人の女子がいた。

初鹿野 涼

セミロングより少し短い黒髪。色白の美人だ。

見た目はとてもよろしいのだが、中身は非常に残念な、少し……、いや、かなり変わった奴だ。

オタクな上に、腐女子。行動もおかしいコイツは、校内でも浮いていた。

しかし、コイツは裏で情報屋をやっている。コイツは、どんな情報でも容易く手に入れてしまう。それを厳重に管理し、客に必要な情報だけ売る。売る情報にも気をつけて、相手に売ると自分が不利になるような情報は、絶対に洩らさない。

このような情報屋以外にも、初鹿野は、裏で色々なことをやっている。

とにかく、謎が多すぎる奴だ。

「職員室から教室へ資料を運んでいる途中、下ってきた先輩に道を譲ろうと横に避けようとして足を踏み外して、後ろに落ちた。後頭部強打。脳震盪・右腕骨折。そのまま病院へ」
後遺症が残らないといいけどね。

初鹿野の言葉が、体に響く。

三神が階段から落ちた。

アイツのことはどうでもいいはずだ。

なのに、この動悸はなんなんだ。

この日、俺は一切、授業に集中できなかった。

08・病室

目が覚めると、真っ先に、白い天井が目に入った。

何があつたのだろうか、記憶をたどってみる。

いつものようにパシリにされて、教室に行く途中で……。

そうだ。階段から落ちたんだ。

ひとつのことを思い出すと、序々に記憶が戻っていった。

きつと、ここは病院だろう。頭が痛い。右腕に違和感がある。

色々と確認したいことはあるが、体中が痛くて、今は何動きたくなかった。

数分後、部屋に入ってきた看護婦さんが、私に気づいて、慌てて先生を呼びに行った。

私の隣には、誰もいない。

父も、母も、親戚も。誰もいない。

私には、父も母もいる。当然、親戚もだ。

でも、両親は仕事のことばかり。親戚はみんな県外。

私の親は昔から、実の娘である私に、見向きもしなかった。

2人が大切にするのは、社会的地位と権力、お金だけだった。父も母も、お互いに口をきかない。話すのは、必要最低限なことだけだった。離婚をしたわけじゃない。同じ家に住んでいるし、結婚式も挙げたそうだ。

なのに、夫婦らしいところが、全くと言っていいほどなかった。

些細な喧嘩も、笑顔も、会話も。

あるのは、お金の取引と仕事の話。

私の家庭には、一般家庭にあるものが何もなかった。

家族団らんの食事も、家族で旅行も、親子喧嘩も、

会話も。

話はする。でも、会話はしなかった。

ただ、自分の言いたいことを言ってるだけ。

最初のころは、どうして2人が会話をしないのか、不思議でたまらなかった。でも、そのころから引っ込み思案だった私は、それを聞くことができなかった。

でも、今ならどうしてかわかる。

2人の間には、愛がないのだ。

人を愛する気持ちがないから、こうなったのだろう。
だから、娘の私にも見向きしない。

小・中学校での授業参観に、私の親は、一度も来なかった。
運動会にも、学園祭にも

入学式や卒業式でさえ

いつの間にか、親に対する私の『悲しみ』の感覚は麻痺していた。だから、これが当たり前だった。

そんなことをぼんやりと考えていると、先生が来た。

「三神さん、どこか動かなかったりはしますか？」
その言葉に首を振る。

「何か見えなかったり、聞こえなかったりは？」

「いえ、大丈夫です……」

先生は、しばらく私の目などを診てから言った。

「いやあ、よかったよ。後遺症もないみたいだし。落ちたときに、脳震盪を起こしてね。後遺症がなくてよかった。まあ、右腕と左足首、右足を骨折したけどね。全身強打したから、体は痛むだろうけど、じきに治るよ。ああ、一ヶ月は確実に入院だよ。左足首は大丈夫だけど、右足と右腕の骨折が酷くてね。右足が治るころには、右腕も少しはよくなっているだろうけど。それまでは入院ね」

「……………はい……………」

先生の言葉を聞いて、少しだけ気が楽になった。いじめられない。そう思っていると。

「親に連絡はしたよ。仕事が忙しいから、来れないらしいけどね」
娘がこんな状態なのにねえ……………。

先生が零す。

私は、なんとも思わなかった。それが『普通』だから。

あの人たちは、私のことをなんとも思っていないだろう。

私は、あの人たちにとっては人形のようなものなのだから。

先生が部屋から出て行って、数十分後。ドアをノックする音が聞こえてきた。

返事をして、入ってきた人たちの顔を見て、私はビックリした。

「……………く、ぬぎ先輩……………！」

そう。梶先輩だった。

それだけでも驚いているのに、その後ろから姿を現した先輩に、更に驚く。

「あっ、あのときの…っ」

昨日の親切な先輩がいたのだ。

「よ、三神」

あのときと同じ、無邪気な笑顔で私に声をかけてくれた。

心成しか、顔が熱い気がする。

いや、そんなことより。

「あ、あの、どうしてここに……………、っ」

そう。どうして先輩が……………、梶先輩までここに来たのかが問題だ。先輩たちは、私とは直接関わりがあるわけではないのに。

そう聞く私に、先輩が答えた。

「心配になったからに決まってるじゃんか」

「…！」

「まっ、瑞紀はそうでもねえみたいだけどな」

「ケツ。強制的に連れてきた奴が何言ってるやがる」

見たところ、2人は仲がいいようだ。

そんな2人を見て真っ先の思うことは、どうしてこうも違いがあるのだろうか、ということだった。

そう思っていると、また誰かが入ってきた。今度は、見たことのない先輩だった。

「どーも、慧ちゃん。怪我、大丈夫じゃなさそうね。まあ、脳に影響がなくてよかったんじゃない？」

気さくそうな人だ。とても美人で、明るそう。私とは正反対の人でも、どうして私の名前を知っているのだろうか？

「ああ、そういえば、初めましてだったわね。あたしは初鹿野涼^{りょう}。二年一組よ」

「あ。俺も自己紹介してねえ」

初鹿野先輩の言葉に、先輩が気づいた。

「俺は、高峰 響平。初鹿野と瑞紀と同じクラスだ。よろしくな」

「あ、はい……っ」

高峰先輩が笑いながら言う。

「それにしても、あの情報は本当だったのね……」

部屋を見て、初鹿野先輩が一言呟く。あの情報って、なんのことだろうか？

そう思うが、私は気にしなかった。

「なあ、三神。お前、入院すんだろ？」

「あ、は、はい……」

「必要なモンとか、親は持ってきてねえのか？」

その言葉を聞いた瞬間、初鹿野先輩が舌打ちをした。そのことに驚く間もなく、初鹿野先輩が目にも留まらぬ速さで、高峰先輩の鳩尾に右ストレートを叩き込んだ。

一瞬のことで、梶先輩も私も、拳を叩き込まれた高峰先輩でさえ、呆気にとられた。

しかし、高峰先輩はすぐに自分の状態に気づき、その場にうずくまる。

高峰先輩をそんな状態にした初鹿野先輩は、何事もなかったかのように振る舞っている。

さすがにこれには、梶先輩も眉をひそめていた。

「慧ちゃん、なんならあたしたちが持つてきてあげるわよ？」

「えっ、でも、悪いですし……、」

「だーいじょぶ、大丈夫。お金盗んだり、物盗んだりはないわ。場所さえ教えてくれれば、準備してきてあげるから」

先輩の言葉に、私は思う。

今、両親は仕事で忙しいため、当分帰ってこないだろう。だから、初鹿野先輩たちが上がっても問題はない。それに、この人たちは、絶対に盗みなどはしない。

だけど、先輩たちに悪い気がする。

そう戸惑っていると、初鹿野先輩が言った。

「あたしたちのことは気にしないでいいのよ。あたしたちが好きでやってるだけだしね。だから、ドーンと任せちゃって」

そう言われて、なぜか安心した。なぜかはわからないけど、とても。

「じゃ、じゃあお願いします……。えと、そのカバンの中に鍵が入ってます」

「ん、これか？」

「あ、はい。そうです」

痛みから復活した高峰先輩が、鍵を取り出す。

「慧ちゃん、服とか、どこに入ってるか、教えてくれる？」

「は、はい……」

先輩に場所を告げていく。

数分後、準備が整い、高峰先輩と初鹿野先輩は、私の家に向かっていった。

病室には、私と梶先輩の2人だけ。

ものすごく、きまずい。

とてもいたたまれない空気が充満していた。

しかし、そんな空気を改善できるわけでもなく、先輩と私は、一時間、ずっと黙ったままだった。

08・病室（後書き）

高峰くんと涼ちゃんのコンビが個人的に好きすぎる。櫛くんと高峰くんは、両方好き。三神ちゃんも大好き。結局のところみんな好き。

09・高峰の一言

「三神って可愛いよな」
「ブツ」

いつも通りの昼休み。

俺が、購買で買ったパックの麦茶を飲んでいると、高峰が一言零した。その言葉に、俺は飲んでいた麦茶を嘔き出してしまった。

それを見た周りの奴らが驚いている。

「きつたねえな、瑞紀い。俺の弁当にかかったらどうしてくれたんだよ」

「す、スマン……、じゃねえ！俺のせいじゃねえだろうが teme エ！誰のせいで俺が嘔き出したと思ってんだアホ！！」

高峰の言葉にキレる。俺は何も悪くない。何も悪くないんだ。

「知らねえよ。俺は思ったことそのまま言っただけだし。なんでキレられなきゃいけないんだよ。なんだ、逆ギレか？キレる10代ってか？」

「蹴り殺すぞバカ峰」

「は！？なんだバカ峰って！ teme にバカって言われたかねえよアホ瑞紀！」

「誰がアホだあ？」

言い返されて、更にイラつときた俺は、挑発してやった。

俺の言葉に、高峰がニヤつと笑って言った。

「お前だよ、お・ま・え！！んなこともわかんなくなっちまったか？幼稚園からやりなおせバーカ！」

「ああ？じゃあ teme は動物園だな！上 動物園にでも送られ

「ちまえ！」

「ハッ。お前は旭 動物園でペンギンと空飛んでろ！」

俺たちの言い争いについていけない周りの奴らが困っている。しかし、そんなことは気にしない。互いのクズのようなプライドを傷つけないために、俺らは言い合いを続ける。

「うつせえ馬鹿！！」

「つんだと、間抜け！！」

ここまでの喧嘩も、最高潮にたつした。俺らは、手を上げる。互いの顔面を殴りあうまで、ほんの2秒ほどしかなかった。なのに。

「何小学生みたいな喧嘩してるの、よっ」

「「っ！？」」

俺たちの拳を、初鹿野が名前のとおり、涼しい顔で受け止めた。

「んなっ、手エどけろ、初鹿野！」

「そうだ！俺たちのプライドをかけた戦いなんだ！」

拳を引つ込めようにも、初鹿野に強く握られているせいで、それは叶わない。コイツ、本当に女なのか……！？

「何がプライドよ。アンタらのプライドなんて、生ゴミ同然でしょ。そんなもん賭けて何になんのよ」

「なっ、生ゴミいつ！？」

「お前、生ゴミは肥料になるんだぞ！！ 生ゴミ馬鹿にすんじゃないえ！！」

「そつだぞ！！」

俺たちは一体、何を言っているんだろうか。言い返すところが違う気がする感が否めないのはなぜだ……！？

そんな俺たちを、初鹿野は呆れたような眼差しで見てる。

「何言ってるのよ……。とにかく、さっさとやめなさい。じゃないと、」

「「！！！」」

初鹿野が俺たちの手を放したと思ったら、後頭部をつかまれ、高峰の頭を俺の頭にぶつけた。

その場に、ゴツン！！ という鈍い音が響く。

「今みたいに、酷い目に遭うわよ」

初鹿野が言う。もうすでに酷い目に遭っているのだが……っ。
ぶつけられたところから衝撃が広がっていき、クラクラと眩暈がした。

脳が揺れている感じがする。気持ち悪い。

高峰は高峰で、額を押さえながら、「うあああー……………っ」やら、「ふぬああー……………」などとわけのわからない声をあげている。

「あたしから見れば、アンタらはゴキブリ以下ね」

クククツ、と、いかにも悪役のように初鹿野が笑った。ム力つくが、顔がいい初鹿野は、その笑いかたがまたかつこよく見えた。

「で、なんの話してたのよ？ あたしも入れてほしいわね」

「ああ。三神は可愛いよなっていう話だ」

初鹿野に高峰が言う。

その言葉を聞いて、また麦茶を噴き出しそうになる。が、初鹿野に殴られるのはまっぴらなので、なんとかこらえる。

「……ゴホッ…、高峰、お前眼科行っただろうがいいぜ」

「は？ 行っただろうがいいのは瑞紀のほうだろ。三神のどこが可愛くないんだよ」

「そうね。柵くめきは国立病院の眼科に行っただろうがいいと思うわ」

「おい初鹿野。お前、今サラッと酷いこと言っただよな」

ポーカーフェイスですごいことを言う初鹿野に、俺はなぜか、いつも以上に冷静だった。おかしいだろ、俺。

「当然のことを言っただよ。どうせなら眼球の移植手術でもしてもらえば？ いい医者を紹介してあげるわよ。アンタのために、こ

の情報はタダにしてあげるから」

「いらん世話だ！　そういうところで情報をタダにするな馬鹿！」

「何よ。タダにするだけじゃ満足いかないっての？　贅沢な奴ね……。しょうがないから、すぐ視力のいい目玉にしてって頼んであげるわよ」

「いらねえよ！　このままでいいわアホ！！」

キレる俺に、初鹿野が舌打ちをした。なんで俺が悪いみたいになっ
てんだよ。わけがわからん。

そんなこと思いつつ、会話を続ける。

「……あんで急にそんなこと言い出すんだよ、高峰」

「え？　いや、三神が入学してきてからずっと思ってたんだけどよ。最近よく思うようになったから、言ってみた。ま、お前は三神が嫌いみたいけどな」

「………なんの、ったりまえだろ……。ああいうウジウジした奴、俺は大嫌いなんだよ……」

俺は、眉根を寄せながら言う。そう。俺は、アイツが大嫌いだ。だから、可愛いとも思わない。というか、なんとも思わない。

そんな俺を見て、高峰は苦笑する。

「じゃあ、質問をかせようじゃないか、櫛くん」

「やめろ、苗字で呼ぶな。なんかきもちわるい」

「俺だってそんな気分なんだよ、毎回毎回！」

俺の言葉に、高峰が怒鳴る。コイツに苗字で呼ばれると、じんましんが出そうになる。

「嫌いか好きかは別として。三神のこと、可愛いかわからないかだつたら、どっちだ？」

その質問に、一瞬、動作が止まった。

三神が可愛いかわ可愛くないか。そんなこと、考えたこともなかった。

俺は、考え込む。

そして、ひとつの結論に辿りついた。

しかし。

「…………… 知るかよ、そんなこと」

そうとだけ言って、食べ終えたパンのゴミと麦茶のパックを持って、俺は屋上に向かった。

「なっ、ちょ、瑞紀っ」

後ろからそんな声が聞こえてきたが、気にしないでそのまま進む。

三神が可愛いかなんて、知るか。んなものに興味はねえんだよ。

そう思っている俺の顔は、なぜか少し、熱かった。

「…………… 櫛って、ツンツンデレなのかしら……………」

「テメエは真剣なツラして何を言ってるやがる」

「あたしが思うにねー」

「無視かよ」

「櫛、慧^{けい}ちゃんのこと、絶対に好きよ」

09・高峰の一言（後書き）

桐くんって、絶対にツンツンデレだ。最後のほうは、そんな考えで書いた。文句は一切受け付けないですよ。桐くんは何がどうなろうとツンツンデレなんだから！

10・驚くべき

「慧ちゃん、熱出したそうよ。39度の高熱」

ある日俺、高峰響平は、初鹿野はじかのからそんなことを聞いた。
俺の後輩、三神慧けいは先日階段から落下し、怪我をして入院して
いる。

幼馴染の櫛くぬぎ瑞紀みずきはなんとも思っていないようだったが、俺は、
心配でならなかった。まあ、病院にいるから大丈夫だろうけど。

初鹿野が言うには、ストレスから出た熱だそうだから、あまり問
題はないそうだ。

そう言われても心配だ。

俺はその日の放課後、部活を休んで、三神の見舞いに行った。

最近、あまり見舞いに来なかったから、三神に会うのは久しぶり
だった。

俺は、逸はやる気持ちを押さえつつ、病室に入った。
ドアを開けると、個室の割には広い部屋。ベッドに横たわる三神。
なるべく音をたてぬように、部屋に入る。

三神は寝ていた。熱が高いせいで、彼女の顔は赤く、苦しそうに
歪められていた。

俺は、三神の頬に触れた。熱い。それも、すごく。

彼女を起こさぬように綺麗な茶髪を梳く。しばらくそうしていると、三神が少しだけ、身をよじった。それにびっくりして、俺はすぐに手を引っ込める。三神は、くぐもった声を漏らしてだけで、起きなかった。安心して、溜息をつく。

しばらく三神の顔を見ていると、なんとも言えない衝動に駆られた。

そして

俺は、三神の額にキスをした。

数秒後、ゆっくりと唇を離し、自分の行動に我に返る。

誰も見ていなかったものの、恥ずかしさが込みあげてきて、俺は病室からそそくさと出た。

俺は何をしてるんだよ……っ！

真っ赤であろう顔を右手で隠しながら外へと出た。
と。

「なんでテメエは顔が赤いんだよ」

「……………っ！っ！っ！?!?!」

「いや、そんなに驚かなくてもいいだろうがよ……」

入り口のすぐ横に、瑞紀がいた。

俺の顔を見た瑞紀がそんなことを言ってきたもんだから、瑞紀がいたことより、指摘されたことに驚いた。

「みつ、みみみみみ瑞紀！ お前なんでここにいんだよっ！」

「…………… お前の様子を見に來ただけだよ……。てか、なんで顔赤いんだよ。テメエも熱か」

「ち、ちげえしつ。俺の様子って、本当はお前も三神のこと心配で来たんだろっ」

「は、はあっ！？　んで俺がアイツの心配なんてしなきゃなんねえんだよ！　ふざけんなバカ峰！」

「……………ああ、そうか……………」

「おい待て。なんだその、『しょうがねえからそういつことにしといてやるよ』みたいな視線は」

「そんなコトナいぜ？」

「なんで片言なんだよ！　お前、絶対に…」

何かと言ってくる瑞紀を無視しつつ、俺は思っ。

「

あのことは、口が裂けても言えねえな……………。

昨日の夕方。

三神の見舞いに行った高峰を、病院の外で待っていたら、なぜか高峰が赤い顔をして中から出てきた。理由を聞いても、高峰は顔を赤くして言葉を濁すだけだった。それに、どこか上の空な感じがした。

初鹿野に聞けば、何か知っているだろうか？

いや、でも流石にそこまでは……

「知ってるわよー？」

「つつつつ！?!?!?!」

「そんなに驚かなくてもいいじゃないの」

なんだろう、この前の高峰とのデジャヴ感が否めない。

しかし、本当に初鹿野は神出鬼没な奴だ。まるで、どこからか湧いてくる蟲のようだ。

「ちよつと。口に出てるわよ」

「うげああつ、！！ いへえ、いへえ！！」

しまった。口に出ていたのか。ってことは、さっきのも全部聞こえてたからコイツが寄ってきたのか。

そんなことを頭の片隅で考えているが、今は、ものすごく強くつねられている頬のほうが大事だ。このままじゃあ？ げる。冗談抜きで、？ げる。

「神出鬼没なのはまあ認めるけど、蟲ってどういうことよ、蟲って！ アンタ、殺されたいわけ？ 別にあたしはいいのよ？ アンタが慧ちゃんけいのパンツ「だあああああああああつ！！！！」言うなあああ！！！ その先は絶対に言うなあああああ！！！！」

初鹿野が恐ろしいことを言いかけて、俺は思わず、でかい声を上げてしまった。教室にいた全員が、こちらを向く。恥ずかしくなつて、机に突っ伏した。

「ふふふー。櫛くものよわみ、あたしにはちゃんめいと届いてるんだから。

そこらへん、弁えておきなさいね」

「……サイアクだ……」

なんとも言えない恥ずかしさと、よくわからないイライラが募る。そんな俺に気づいているであろう、俺の前にいる悪魔は言った。

「高峰のことも知ってるわよ？」

「っ、マジか!？」

その言葉を聞いて、俺は顔を上げる。

「当たり前じゃない。あたしの情報網に入ってこない情報なんてないんだから。大抵のことは知ってるわよ。アンタの昨日の夕飯とかね」

「お前何だよ。盗撮でもしてるのか」

「違うわよ。まあ、法には触れてるだろうけどねー」

ちよつと待て。コイツ今、恐ろしいこと言ったぞ。

今の発言を聞いて、俺は、コイツには深く関わらないようにしよう、心の中でそつと思った。

いや、そんなことより。

「高峰のこと、教えてくれるか？」

「んー、そうねーえ。それなら、これで売ってあげないこともないわよ？」

そう言いながら、初鹿野が5本指を出す。コイツの指一本の単位は、大体が万なのだ。万単位じゃない場合は、口で言うことが多いらしい。初鹿野が請求する金額が用意できない額と、噂では有名だった。

5本指ということは、5万だろうか？

そう思っ、俺は初鹿野に聞く。

「5万、か？」

「いいえ。10万よ」

「そっちか！」

いや、どっちだよ、俺。

「んな額、準備できるわけねえだろうが！ 頭イカレてるだろ、お

前！」

「お褒めの言葉ありがとう。アンタがいくら何と言おうと、額が上がるだけで下がることはないわよ」

それぐらい重要な情報なの。

初鹿野は、柄に合わない真剣な眼差しで言った。つまり、売るような情報じゃないのだろう。それか、その情報を漏らすと、初鹿野にとって不利なことがあるのか。

「理由だけは、タダで教えてあげるわよ？」

「そこで金払えって言うなら、お前は人間失格だと思うぞ」
理由も情報の一環かもしれないが、金を請求するのは、人間失格だ。

「なんとも言いなさいな。アンタも知ってるでしょうけどね、あたしは、自分の不利になるような情報は絶対に漏らさないの。アンタは、今回もそうだと思うてるでしょうね。まあ、確かに間違っちゃいないわよ。でもね、どちらかというと、アンタと高峰のために言わないのよ」

は？

俺は、初鹿野の言葉に呆気にとられてしまった。

俺と高峰のためって、どういうことだよ？

「あたしから言えるようなことじゃないもの」

初鹿野が口の端をくい、と少し上げながら言った。

そんなのが、理由なのか？

さっきのイライラが、また酷くなって、俺は怒鳴りかけた。
「ふざけんな、」

しかし。

「黙りなさい」

怒鳴りかけた俺を、初鹿野は鋭い声色で制した。今まで聞いたことのない声に、教室は静まった。こちらを向いている顔たちの中に、高峰の顔もあった。

「アンタは知らないでしょうけどね、あたしがこうやって友好関係の情報を漏らさないのは、そんなにないことなのよ。どうでもいい馬鹿な野郎どもにだったら、自分に不利にならない情報売ってるわよ。今回情報を売らないのは、アンタらが本当に仲のいい奴等だからよ。あたしが売った情報で、アンタたちの関係が崩れるなら、情報屋なんてやめてやるわ!」

そう言う初鹿野は、怒りと悲しみが混じったような、複雑な表情をしていた。

どうして、こんな顔をしているのか、今の俺には聞けなかった。「まだ文句があるなら、いくらでも聞くわ。でも、絶対に情報は漏らさない」

さっきの声色と打って変わって、落ち着いた声で言った。

俺は、「もういい」と言った。どうしようが、情報は売ってもらえない。だから、諦めて、高峰に直接聞くことにした。

俺の言葉を聞くと、初鹿野は、「そう」とだけ言って、その場を去ってしまった。

「おい、どうしたんだよ、お前ら」

初鹿野が去った後、高峰が近寄ってきた。

「ちよつとな……………」

お前が絡んでるんだよ、とは言えずに、俺は苦笑するしかできなかった。

屋上に一人で立つ少女は、誰にでもなく、一言、言葉を零した。

「あんな光景は、もう絶対に見ないわ」

絶対に、絶対に見ない。見たくない。

12・この前の真相

ある日の屋上。

「高峰」

「んー？」

「聞いてるか」

「んー？」

「聞いてないか」

「んー？」

「デメエ殺すぞ」

「ぬおあつ！？ すつ、スマン瑞紀！　なんだ！？」

高峰に何があつたか聞き出そうと思い、話しかける。しかし、全く聞いていない。上の空なのだ。

こんなだから、聞き出さなくても聞き出せないのだ。どうしよう。

初鹿野にはこの前怒られた。なぜかはわからないが。まあ、最初っから人の情報売るなんてことはよくないから、普通なら、その判断は正しいだろう。でも、あの初鹿野が言わないなんて、一体アイツに何があつたんだろうか。そんなことはさておき。

「お前、このまえからずっとおかしいぞ。何があつたんだよ。俺に言えねえことなのか？」

高峰に聞いてみる。すると、コイツはピクっと肩を揺らして、俺のほづを、引きつった顔で見してきた。

「い、いや、なんもねえよ……………」

絶対にあるだろ。お前のその反応。そういえば、コイツは嘘をつくのが苦手だった。絶対に何かあったのだ。

「嘘つくな。正直に言え」

俺の言葉に、高峰が俯く。そんなに言いたくないのだろうか。そう思っていると。

「瑞紀さ…………、俺の話聞いて、何言ってもいいけどよ…………。絶対、他人には言つなよ……………」

高峰が俺を、赤い顔で見してきた。

…………。

「わかった」

「ほっ、ほんとか!？」

「ああ。だからよ……………」

「俺のこと、赤い顔しながら見上げるな。じゃないと……………」

「高峰って受けなの!？ まさかの告白タイム!？ ボーイズ同士でラブってるの!？ いいわね萌えるわ!!!」

「初鹿野黙れ！ 気持ちワリイこと言ってんじゃねえ！！」
コイツが来るから！

初鹿野は、本当に神出鬼没だ。ありえないときに現れる。

「BLを侮辱したわね！！ 全世界の腐女子とゲイに謝りなさいよ！ 高峰とやりながら謝罪しなさいよ！！」

「待て。最後のほうおかしかったぞ。てか、全部おかしいぞ」

「別にアンタが突っ込まれるほうでもい「ざ・け・ん・なっ！！！」」

おかしなことを言い出す初鹿野の服の襟を掴む。コイツが女なんて思いもしねえ。

「ちよつと、襟掴まないでよ。あんたのせいで服が伸びるでしょ」

「知るか、んなこと！」

「お、おい、瑞紀……、」

「このままコイツをブツ殺……」

「今すぐ放さないと、アンタの目の前であたしがエロい格好した拳句、^{くぬぎ}櫛強姦疑惑を流すわよ」

「すいませんでした」

初鹿野が恐ろしいことを言い出したので、とっさに手を放して土下座をした。そんな情報を流されては困る。

「よろしい。じゃ、なんか大切な話みたいだから、あたしはもう行くわね。おいしい写メも撮れたし」

「！？ まっ、まさかテメエ、」

「じゃあにーい」

「なっ、初鹿野テメエ待てっ、おい、ちよ、」

ひらひらと手を振りながら、脱兎の如く逃げた初鹿野を、俺は追うことができなかった。

しょうがない。今はそれより、高峰のほうが大事だ。

「で、なんだよ」

俺が向き直ると、高峰が言いにくそうに口を開いた。

「俺さ………」

高峰の口から出た言葉が、俺はしばらく理解できなかった。

『三神のデコに、キスしちゃった』

別に、俺には関係ない。

アイツと高峰が何しようとか。

なのに、それを聞いて苛立っている俺がいる。

どうしてなんだよ。

「
なんでだよ」

俺の零した言葉に、高峰は顔を歪めてから、また俯いた。

13・ 体育館裏で

病院から退院できた私、三神 慧は、まだ完治していない右腕を吊りながら学校に来た。

教室に入った瞬間、みんなからジロジロと見られた。その視線がいやで、私は必死に目をそらした。

久しぶりの自分の机。流石に、落書きはされていなかった。そんなことしたら、虐めをしていると先生にバレるからだろう。やっぱり、人間はおかしなところで知恵が働く。

ボンヤリとそう思いつつ、私は席についた。なんとなく机の中に目をやると、紙が入っていた。何かと思って見てみると、そこには鉛筆で大きく、『お前なんか帰ってこなければよかったのに』と書いてあった。

紙を見たまま固まっている私のほうを、何人かの女子がクスクスと笑いながら見ていた。

きつと、これを書いたのはあの人たちだろう。

私のことを見ている子たちは、とても楽しそうだ。

性格が悪い。ゴミみたいな奴らだ。

そう思いつつ、私は自分が嫌になった。

弱虫なくせに、どうしてこういうことは思えるのだろうか。思っくらいなら、言えばいいのに。

現に、そう思いながら私は泣きそうになっている。

弱い心。強気な考え。

うまくバランスが取れていないんだ。
心は弱いのに、考えは強気だなんて。

こんなより、完全に弱虫のほうが全然マシだ。
そうしたら、こんなに苦しまないのに。こんな余計な苦しみは
ないのに。

零れそうになる涙を拭って、紙をぐしゃぐしゃと丸める。そうし
て、制服のポケットに入れる。

家に帰ったら捨てよう。学校のゴミ箱じゃ、誰かに見られてしま
うかもしれない。そうしたら、色々と面倒なことになる。それだけ
は勘弁だ。

そんなところに、先生が来た。

ああ、今日からまた、辛い生活が始まる。

午前中の授業が終わり、昼休みに入った。

教室は、他のクラスの子たちが来たりして賑やかだ。
こんな中、一人でお弁当を食べるなんて嫌だ。

私は、教室から逃げるように出て、早足で校舎から出た。

屋上も賑やかだ。静かなところは、あそこだけだろう。

入学してからすぐに見つけた、体育館裏の木陰。
ジメジメと暗いわけでもなく、日差しが強いわけでもなく。丁度
いいところ。

私は、ここが好きだった。

昼休みは、誰もいない。友達がいるんだから、わざわざこんなと
ころに来るような捻くれた人はいないだろう。
そう思いながら体育館の壁から顔を出すと。

そこには、私の信賴している、高峰先輩がいた。

びっくりして固まっている私。先輩のほうを凝視してしまって、
視線に気づいた先輩と目が合う。

それに更にビックリして、大きな声を出してしまった。

「あつ、たつ、高峰せんぱつ、」
「三神」

そんなところで何してるんだよ。

高峰先輩が、少し驚きながら聞いてくる。

大きな声を出してしまったことが恥ずかしくて、小さな声しか出すことができなかった。

私の答えが聞こえなかったんだろう（当然か）。高峰先輩は、優しい笑みを浮かべながら「こっち来いよ」と言ってきた。

その笑顔がかつこよくて、熱い顔が更に熱くなる。

小走りで先輩のほうに行くと、「座れ」と言われた。

少しためらったが、私はゆっくりと先輩の隣に腰を降ろした。

「弁当、食いに来たのか？」

「あ、はい……。一緒に食べる人、いないんで……」

そう言いながら、私は目を伏せて笑った。

高峰先輩は、こんな私をどう思うのだろうか。

哀れむのだろうか。

蔑むのだろうか。

まただ。

人の考えてることに怯えている。

どうしてこうなんだろう。

そんなふうに、一人で色々思っていると、頭に手を置かれた。それに少し驚いて顔を上げると、高峰先輩が笑っていた。

……？ 何を笑っているのだろうか？

疑問に思っていると、高峰先輩が言った。

「偶然だな。俺も一人なんだ」

だから、一緒に弁当食おうぜ。

その言葉に、私はまた驚いた。

「でっ、でも、せ、先輩、くっ、くぬぎ 梶先輩と食べないんですか、……
っ？」

そう。先輩には、梶先輩がいる。

二人は幼馴染だそうだ。そうだ、というのは、初鹿野先輩から聞いただけで、真相はよくわからないのだ。

でも、先輩たちはいつも一緒にいる。仲もとってもいい。

友達でも、やっぱり違う人と食べたりするのだろうか？

友達がいらない私には、そこらへんは全くわからない。

私の言葉に、高峰先輩は顔を歪ませた。

……まずい。私、今何かマズイこと言ったかも……っ。

どうしよう。先輩、傷ついたかもしれない。人が傷つくようなことを言ってしまった。

一人でマイナスな考えに埋まっている私に、高峰先輩が言った。

「おいおい。顔が真っ青だぞ、三神」

「せっ、先輩っ、わた、私先輩の気に障ることっ、」

「言ってねえよ。大丈夫だから泣くなっ」

そう言いながら、先輩が親指で私の涙を拭う。
大きなその手に、なぜか少しだけ安心した。それと同時に、脈を打つ速度が速くなる。

「す、すみません……」

「謝ることないだろ。あのな、こないだ瑞紀と喧嘩しちまってさ……」

やっぱり私余計なこと言った！

「せつ、せんぱつ、すみませつ、たし、っ」

「！？ いや、だから泣くなって！ お前は何も言ってねえよ！
だから泣くな！」

急に大泣きしだした私に、高峰先輩が慌てる。

私があんなこと言えば、先輩が顔を歪めるのも当然だ。ああ、私の馬鹿……っ！

「で、でもっ、」

「大丈夫だから泣くなって！ 泣かれると俺も困るから！」

その言葉に、ピタリと泣くのをやめる私。

そっだ。私が泣いてたら、先輩に迷惑だ。

ありもしないような気合で泣くのをやめる。

「……ぐす、……っすみません……」

「謝るなって。大丈夫だから」

苦笑しながら言う高峰先輩。

先輩に迷惑かけてばかりで、申し訳なくなる私。

先輩の顔を見るのが気まずくて、私は無言でお弁当を食べ始めた。
そんな私を見て、高峰先輩がまた話を始めた。

「俺、瑞紀と喧嘩……、いや、喧嘩でもないけどさ。ちょっと気ま
ずくなっちゃったんだよ。まあ、俺のせいなんだけどな」

「……？ 先輩たちも、そういうこと、あるんですか…？」

「そりゃ、しょっちゅうあるよ。ちっちゃいことで、しょっちゅう
そう言う先輩の顔は、とても楽しそうで。その顔を見て、私も少
し嬉しくなった。

高峰先輩は、笑つてるときが一番かっこいい。

無意識のうちにそんなこと思ってしまったて、恥ずかしくなる。
そんな私に気づかず、先輩は話を続ける。

「そんでな。この前、俺、ちょっとマズイことやっちゃってさ。そ
れ言ったら、瑞紀がちよっと機嫌損ねたっていうか……。それで、そ
の日から気まずくて、話してないんだよ、アイツと」

マズイこと………？

高峰先輩は、そんなことしなさそうな人なのに。どちらかとい
うと、梶先輩がしそうだ。

いや、それより。

どうして高峰先輩がやってしまったことで梶先輩が機嫌を損ねた
のだろうか？

「せ、先輩、梶先輩のお弁当、食べちゃったりしたんですか…？」
私の質問に、先輩が吹き出す。

「三神は面白いこと言うなあ！ 違うよ。どっちかつーと、それ
は瑞紀がやって俺が怒るほう。アイツ、俺の弁当よく盗むんだよ」
先輩の言葉に、私は恥ずかしくなった。ああ、もう。笑われた…
…っ。

「俺がやったのは、そんなんじゃない。アイツの好きな子に、キスしちゃったんだよ」

「……………！?!?!」

キス

聞き慣れないその単語に、一気に顔が熱くなる。今、私の顔は真っ赤だろう。

「まあ、キスっていつでもデコにだけどな」

クスッと笑う高峰先輩。

それでもやっぱりキスに変わりはない。

「そ、それって、あのっ、」

「ん？」

「せつ、先輩も、その人のことがっ、す、すすす、好きって、ことですよ、ね…………っ？」

私の言葉に、先輩は数秒固まってから、急に顔を赤くした。

「えっ、！？ い、いや、まあ、その、な！ 好きじゃなかったら、キスなんて、し、しないだろうっ、」

まあ、尤もな話だけど…。

そう思っていると、高峰先輩は立ち上がって言った。

「わっ、悪い！ 用事思い出した！ 一人にしてごめん！ 俺戻るな！」

「え、あ、はい、」

言い終わると、高峰先輩はすごい速さで走って行ってしまった。

…それにしても……………。

「梶先輩も、好きな人なんてできるんだ……………」

そんな独り言を言った後に思った。

私の梶先輩のイメージって、好きな人なんてできないくらい極悪非道な人だったんだ……………。

14・突飛な行動

高峰にあのことを聞いて、少ししてから三神が帰ってきて。

最近、俺はドタバタしっぱなしだ。あのことを聞いてから、高峰との間には気まずい空気が漂いっぱなしで、その上初鹿野も忙しいようで、全然話していない。

とにかく、簡単に言ってしまうえば、最近の俺は不幸が続いてばかりで、いいことが何もなかった。

現に今だって、授業に集中していなかったせいで教師に怒られている。

どうしてこんなに不幸が続くんだよ。なんだ。俺には災難の神様が憑いてるのか？ いや、災難って時点で神様ではないな。

説教をされながらそんなことを考えていて上の空だったせいで、また教師に怒られる。

ああ、考えてみればそうだ。アイツと関わりあつてからだ。

初鹿野に怒鳴られたのも、高峰と仲たがいのしたのも、教師に怒られてるのも、全部全部全部……っ、！

「事の発端は全部、アイツの下着みてからじゃねえかよ！！」

思い切り、思っていたことが口に出てしまった。

教師は目を見開いてから、眉根を寄せて訝しげにこちらを見る。

初鹿野を除くクラスメイトたちは、こちらに驚きやら好奇やら、人それぞれにいろんなことを思いながらこちらを見ている（ちなみに初鹿野はニヤニヤしながら、男二人が絡み合っている表紙の本を読んでいる。隣の席の奴がこちらを見つつ、初鹿野のほうを横目で引

きながら見ている)。

そんなことを思いつつ、はっと我に返ってから教師のほうを見る。
ああ、怒っているな。

第一声は決まっている。

「お前、誰の下着を見たんだ」

このことに触れない人間なんて、初鹿野とか、そういった変わり者ぐらいだろう。変わった奴でも、触れてくる奴は触れてくるだろうが……。

いや、そんなことよりだ！

マズイことになった。どうしてよりによって、下着のことなんか言ってしまった、俺！ もっと別のことがあっただろうが！

ああ、どう言い訳をすれば……。っ。クソっ、初鹿野こっちを見ながら厭味つたらしい眼を向けてくんない！

落ち着け、俺。バスケであんなに素晴らしい判断力をつけたではないか。それをここで発揮すれば、なんとか危機は免れる……。よし！

「おい、櫛。お前、まさか女子の下着を……」

「いいえ。断じて違います。俺は女子なんかの下着に興味はありません」

ちょっと待て。

今のはおかしかったぞ、俺。今のだと、まるで俺がホモだと勘違

いされるような言い方じゃねえかよ、オイ。

ああ、教師が哀れみを含んだ眼で見てくる。一部を除く女子たちが、とても残念そうな眼でこちらを見てくる。初鹿野あたりの腐った女子たちはとても嬉しそうな眼でこちらを見ているが……。男子なんか、前後でヒソヒソ話してるしよ……。俺にそんな趣味はない！！ 決して！！

「……櫛……」

「先生、違います。言い訳をさせてください」

「私はいんだよ。それに、人にはそれぞれ価値観ってものがあるからな」

俺の話に一切聞く耳を持たずに、教師は話を続ける。

価値観とかそういうのはいいから、とりあえず言い訳をさせてくれ……！

「でもな、櫛……」

「先生、あの、」

「私のパンツは、何があっても死守するからな……！」

「中年に興味はないんで安心してください先生」

すかさずツツコミを入れる俺。少し……いや、だいぶズレている気がするが、これだけはツツコンでおかないと今後の俺の青春に関わるんだ。

百億歩譲ってホモはいい。しかし、ホモでしかも中年が好きだなんて知れ渡ったら……！！

「櫛、今のは少し酷くないか？ 私は仮にも教師だし、即答なんて

……」

「すみません。謝るんでそんな酷く傷ついたような顔で見ないでください」

その皺だらけの顔を殴りたくなるんで。

そう思ったが、最後のは言わないでおいた。当然だ。こんなこと言ったら、停学になるかもしれない。それはごめんだ。いや、でもこの醜いツラを殴れるなら、停学なんて安いもんか……。そんなことを思ってしまう自分がいて、ああ、俺ももう末期か、なんてことを思う。

こんな感じで、今日の授業は散々だった。その上、俺がホモだった、なんていうあられもない仮説が立ってしまった。そこらへんは初鹿野になんとかしてもらおう。金をとられるのは嫌だが、一生に一度しかない高校時代の青春をそんな仮説で潰されるなんて、堪ったもんじゃない。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、目の前に何かが落ちていた。たぶん、教科書かノートだろう。近づいてよく見てみると、それはノートだった。

ノートを拾って、名前がないか見てみる。

そこには、女子特有の丸みを帯びた字で『1 - 3 三神 慧』と書かれていた。それを見て、思わず舌打ちをする。

コイツは、俺が最も嫌いな奴だ。そんな奴のノートを拾ってしまったなんて、最悪以外、なんと言えがいいのだろうか。

でも、アイツのノートがなんでこんなところに落ちているのだろうか。ふと顔を上げると、1年3組の文字が目に入った。ああ、教室が近くにあるなら、落ちていても違和感はないな。

そう思いながら、ノートを開いてみると。

『学校に来るな』

表紙の裏側に、マジックでそう書かれていた。他にも、落書きがしてあったり、ページが破ってあったりしていた。いかにもイジメと見て取れるものだ。

よくページを見てみると、数式などが書いてあることから、数学用のノートだとわかった。

……アイツは…、

「何、してるんですか……っ、」

そう思いかけたとき、後ろから弱々しい声がした。

振り返るとそこには、案の定、右腕を吊ったアイツが立っていた。怯えたような、だけど怒りが混じっている顔をしながら。目には涙の膜が張っている。

「その、ノート…、私の、ですよ、ね…っ、」

「……ああ。ここに落ちてた」

小さい歩幅でこちらに歩み寄ってくる三神。それを見たまま、俺は動かなかった。

「……、中、見たんですか……、っ」

「ああ、見た」

俺の答えに、三神は涙の嵩を少し増やして、下唇を噛んだ。

「人の、ノートの中、勝手に見る、なんて…、最低、ですね……っ」

コイツは、ノートがどうなっているかわかっているから、こんなことを言うのだろう。

そう思いながら立っている俺に、三神が言ってきた。

「ノート、返して、ください。拾ってくれて、ありがとう、ごさいました……、」

俺に言ってくる声は、震えていた。

これは、涙声なのだろうか。それとも、俺が怖くて、なのだろうか。

まあ、どっちにしろ、

「まだ返すとは言ってねえ」

「、っ！」

俺はノートを後ろに隠すようにした。すると、三神は驚いたような顔をした。が、すぐに「返せ」とせがんでくる。

「返して、くださいっ、」

「嫌だ」

「どうして、ですか……！」

「これの中身見て、放っておく奴はいねえと思うぞ」

その言葉に、三神の勢いが衰える。そうして、口をつぐんだ。

「なんで、こんなの放っておくんだ」

俺の質問に、三神は小声で言う。

「……、先輩には、関係ない、でしょう……っ」

三神の言葉を聞いて、俺はまた言った。

「教師や親には、言ったのか」

すると、三神がキッと、俺のほうを睨んできた。
そして、大声で言った。

「先輩には、関係ないじゃないですか！！」

それに、思わず俺は呆気を取られてしまった。しかし、そんなことにかまわず、三神は話していく。

「先輩は、私のことが嫌いなんでしょう！　だったら、尚更ですよ！　私のことに、首突っ込んでこないでください！」

そう言われて、俺は、ずいぶんと前のことを思い出した。そうだ。コイツに初めて言った言葉は、それだった。そんなこと、忘れたと思ったが、覚えていたのか。

「私がどうなったって、先輩はどうも思わないでしょう！」

その言葉を聞いて、俺の中で何かが切れた。

泣き叫んでいる三神の襟を引っつかむ。三神が怯えたような声を出したが、そんなのは無視だ。

今、重要なのは。

「馬鹿なことやってんじゃねえぞ、ビビリ！！」

三神が怯えているなんてことじゃなくて、

「俺はどうも思わないかもしれないけど、他の奴らはどうなんだ！　虐めている奴を除いた、教師や、親や、」

「高峰と初鹿野の想いは、どうなっちまうんだよ!!」

そう言うと、三神が目を見開く。

「いくら少ししか関わってねえからって、アイツらはお前のこと慕ってんだぞ。それを、どうしてお前はわからないんだよ。教師だつてそうだ。このこと知ったら、ショック受けるだろ。お前の家庭の事情は知らねえけど、親だつて少なからず心配はする」

なのに、どうしてわかんねえんだ。

そう言いながら襟を放すと、三神はその場にへたれこんだ。そして、無言で泣き出した。

溢れてくる涙は、そのまま重力に従って廊下を濡らした。

俺は、それを見ながらノートを力任せに破った。

その音に気づいた三神は、信じられないような眼でこちらを見てきた。

三神が何かを言おうとしたが、俺はそれを遮るように言った。

「こんなもんあっても、勉強できねえだろうが。お前が傷つくだけだろ」

それでも必要なのか。

そう問えば、三神は泣きながら「いらない」と首を振った。

もつすでに原形をとどめていないノートを左手に握って、三神の

前にしゃがむ。

それに驚いて後退りしようとする三神の腕を、空いている右手で掴んだ。

「え、あの、櫂、せん、わっ!？」

掴んだ腕をそのまま引つ張ると、三神が前のめりになる。支えをなくしたその体は、必然的に俺の腕の中に収まるわけで。

そう。三神は俺の腕の中だ。

慌てていた三神は、更に慌てて暴れようとする。が、男の俺に三神が力で勝てるわけない。初鹿野とは違うのだ。俺が三神の体をホルドすれば、暴れるに暴れられない。

最初から敵わないとわかっていた三神は、すぐに抵抗するのをやめた。

それを見て俺は力を少し緩めた。代わりに、少しでもこちらに三神の体を寄せた。三神は、俺の突飛な行動に怯えているのだろう。が、震える手が俺の制服の裾をきゅ、と掴んできて、そんなに警戒していないことがわかった。

数分後、俺たちは互いに恥ずかしくなって、その場から逃げるように去った。

ああ。

あんなことしてしまったら。

あんなことされてしまったら。

（もう、嫌いとか言えねえじゃねえか……っ！）

（先輩に会ったびに、頭がおかしくなりそうじゃないですか……っ！）

（次から、どういう顔して会えばいいんだろう……？）

15・数学のノート

梶先輩くめに抱き寄せられた後、私も梶先輩も恥ずかしくなってしまう。その場から逃げるようにして帰った。

そのときは気づかなかったが夜、家に帰ってから重要なことを思い出した。

「数学のノート、どうしよう……っ」

私のボロボロになった数学のノートは、梶先輩がビリビリに破ってしまった。でも、むしろあのノートは、ああしたほうがよかったのかもしれない。

そう思いながら、梶先輩の言っていたことを思い出す。

『こんなものがあっても、お前が傷つくだけだろう』

あの人は、私のことが嫌いなのに、どうしてあんなこと言ったんだろう。

梶先輩は、どうも掴めない人だ。私のことを嫌いと言ったかと思えば、私のことを慰めるようなこともする。気まぐれなのだろうか？でも……、

今日のあのことを思い出して、顔が熱くなる。高峰先輩の笑顔を見たときと同じように。それに、鼓動も速くなった。しかも、高峰先輩のとき以上に。

嫌いな人なのに、どうしてこんなになってるの……っ。

そんなことより、数学のノートはどうしよう。私は写させてもらえるような友達がいらない。私のクラスに味方はいないのだ。

私はそんなことを考えつつ、妙に疲れていたので、眠りにつくことにした。

リビングの机には、ラップをかけた夕食を二人分置いておいた。

翌朝。

教室に向かっていると、教室のドアの横でカバンを肩にかけたまま俯いている櫛先輩の姿があった。眠いのか、ときどき欠伸をしている。教室に入っていく女子生徒たちは皆、櫛先輩に見惚れて頬を染めていた。

どうしよう。昨日あんなことがあったせいで、先輩の顔を見るのが気まずい。

そんなことで私が内心焦っていると、櫛先輩と目が合った。

……最悪っ。

瞬間、私は顔が熱くなった。きっと、私の顔は赤いだろう。ああ、最悪だ。

顔を見られないように慌てて俯く。それから、チラとなるべく顔を上げないように先輩を見ると、先輩も顔を赤くしていた。先輩も昨日のことを思い出してしまったようだ。

私がある場で俯いていると、先輩がこちらに歩いてきた。廊下を

歩いている子や、教室にいる子たちがこちらを凝視してくる。そんなに見なくてもいいじゃん……っ！

そう思っていると、先輩が私の前に何かを差し出してきた。

ゆつくりと顔を上げると、そこには、薄汚れたノートが５冊ほどあった。どれも油性ペンで『数学』と書かれている。ノートの右端のほうを見れば、梶先輩の名前と『１年５組』の文字。

私は、ぱつと顔を上げて先輩を見た。

先輩は、赤い顔をしながら、気まずそうに目を伏せつつ、私と目を合わせないようにしながらこちらを見ていた。

「あ、あの、先輩、このノート……、」

「お前のノート、昨日あんなにしちまったから、その……」

梶先輩は、いつもとは１８０度違う態度で話していた。私はそれに拍子抜けしてしまい、思わず先輩を見つめてしまう。

それで恥ずかしくなったのか、自棄^{ヤケ}になったのか、先輩は少し大きな声で言った。

「俺が使ってたノートやるよ……！」

先輩はそう言って私にノートを押しつけて行ってしまった。右手が使えない私は、突然のことでノートを受け取れず、何冊かが廊下に落ちた。

そんなことにも気にせず先輩が走っていったほうを見ると、今やってきた人が静寂を破った。その場にいる生徒みんなが、そちらを向く。

静寂を破った人物は、

「あら、なんかすごい人だからじゃないの」

「うわ、なんだこれ……、」

初鹿野先輩と高峰先輩だった。はじかの

空気を読まずに、初鹿野先輩がズカズカと歩いてくる。その後、高峰先輩が気まずそうについてきた。

「どうしたの？」

「え、いや、あの……、くっ、櫛先輩が、その、こ、これを持ってきて、それで……、」

「櫛はもう行っちゃった？」

「は、はい……」

「そう……」

私の言葉に、初鹿野先輩が腰に手を当てて、じろ、と後ろの高峰先輩を見た。というより睨んだ。それに高峰先輩が縮こまる。周りの空気も一瞬凍った。

初鹿野先輩は、たまにすごく怖くなる。どうしてなんだろうか？

と、私が思っていると、初鹿野先輩が私のほうを向いた。それに、今度は私がビククリする。

「ねえ」

「あつ、はいっ。な、なんですか、っ」

「そのノート、どうしたの？」

驚く私を無視して、初鹿野先輩が落ちているノートを指さす。それにやっと気づいて、私はノートを拾った。

「あの、これ、櫛先輩がくれて……」

「櫛が？ 全部数学のノートよね、それ」

「あ、はい。その、昨日数学のノートを、櫛先輩が破ってしまつて……。でっ、でも、違うんですよ！ 先輩は、悪気があつてやったんじゃないくて、その、えっと、」

言葉が足りなくて焦る私。それを見て、初鹿野先輩は笑って言った。

「言わなくてもいいわよ。だいたい事情はわかったから」

その言葉に私がほっとしたとき、初鹿野先輩は片方の口角をあげながら言った。

「今度そのノートに何かされたら、あたしに言ってね」

「……え、」

「櫛には、一言言っておくわ。じゃあ、またね」

「あ、あの、せんば」

私が引き止めようとしたとき。

初鹿野先輩は何かを思い出したかのように足を止めて、こちらを振り向いた。

そして。

「慧ちゃんに酷いことするなんて、自殺行為よね！」

そう言った初鹿野先輩の声は、やけにはつきりと通っていて、瞳は獲物を狙っている獣のようだった。顔は笑っているのに、目はまったく笑っていないくて、とても冷酷で残酷なものだった。

ただただ、ゾツとした。

私はその場に貼り付けられたかのように動けなくなって、教室にいる生徒の一部は、顔を真っ青にしていた。

そんな私たちを尻目に、初鹿野先輩はいつもの調子で歩いていく。

その後ろ姿を見ながら、私の中には疑問の渦が巻いた。

初鹿野先輩は、いい人じゃないの？

本当は、とても冷酷で、残酷な人なの？

「おい、お前ら。どうしたんだ？」
疑問符で埋まっていく私を現実に戻したのは、担任の声だった。

初鹿野先輩はいい人なのに。
本当は、すごくいい人なのに。

初鹿野先輩のあの顔と瞳が、私の頭から離れなかった。

16・転校生

櫛先輩くしせんぱいから数学のノートを買った。

初鹿野先輩はしかのの残酷で冷徹な瞳を見た。

そんなことがあってから、私の周囲の状況は一変した。

いじめは減った。まだつかかってくる人はいるものの、大きないじめはなくなった。

その代わり、クラスの子たちの視線が痛い。私を蔑むような、冷たいような眼。

いじめが減ったから良かった。

私は、そんなこと思っていなかった。

いじめて欲しいわけではない。でも、白い眼で見られるくらいなら、まだ直接的なもののほうが気が楽なのだ。

私は、今の状況のほうが辛かった。

右腕は、あと少しでギブスが取れる。そうすれば、両腕が自由だ。リハビリもあるけど、左腕だけよりは全然マシだ。

そんなことを思いながら、私はボンヤリと外を眺めていた。私の後ろでは、クラスの子たちがいつも以上に騒いでいる。

なんだろう？ 今日は何かあるのだろうか？

そう思ったが、そんな考えはすぐに頭の片隅に追いやった。

私には関係のないことだ。あの子たちの輪の中に、私は入っていないのだから。

そのとき、私の脳裏に中学生のときの記憶がよぎった。

こういうふうにしていた私に、一人だけ、声をかけてくれた子がいた。

私は、その子と友達だった。私の数少ない友達のうちの一人だ。でも、その子の中2のときに転校してしまった。それから、私はひとりになったのだ。

あの子は今、何をしているのだろうか。

そんな想いは、強く吹いてきた風に攫われていった。

黒板に書かれた名前に、私は目を疑っていた。

『山本 香織』

そんな私を尻目に、教卓の横で黒髪をひとつに束ねた明るい表情の女の子が口を開いた。

「沢田高校から転校してきました、山本 香織です！ みなさんと早く仲良くなればいいと思います！ よろしくお願いします！」
そう言つてにこつと笑う彼女。

私は、彼女を見てなんとも言えない緊張感に包まれた。
なぜかはわからない。けれど、緊張していた。

いじめられるとか、そういう緊張ではないのは確かだ。
考えてみると、答えはすぐに出た。

そんな私の考えを、チャイムが遮った。さへき

休み時間。

当然の如く、転校生の周りには人だかりができていた。そこを中に、教室は賑やかだ。

いつもの私なら、きっとそれを見ているだけだろう。

しかし、今日は違う。今日は、あの輪に入れなくても、あの子と話することができればいいと思った。

でも、普段そんなことしないせいで、輪の中に上手く入っていけない。

私は、おどおどしているだけだった。

そんな私の耳に、言葉が入ってきた。

『ねえ、山本さん』

『何？』

『あの子、三神 慧っていうんだけどね……、』

私は、それを聞かないようにした。そちらに背中を向けたら、指をさされた。横目で見える。それに、本人たちは小声で話している

ようだが、生憎、私は耳がいい。聞こえない部分もあるが、だいたいは聞き取れる。

きつと、私のことを気に入らない人が、転校生に色々と吹き込んでいるのだろう。ああ、本当に、同じ人間と認識したくない。

そう思ったとき。

「慧のこと悪く言ってんじゃないわよ！！」

そんな大きな声が聞こえてきた。

私は、自分の名前が大声で言われたことに驚いて、そちらを向いた。

そこには、人だかりの中立っている彼女がいた。それも、眉間に思い切り皺を寄せて、怒った表情をしながら。

一体何だというのだ。

どうして彼女はあんなに怒っているんだろうか？

私だけじゃなく、彼女の周りにいた子たちも全く状況が理解できていないようだった。人だかりの間から、驚きを隠せないでいる斉藤さんが見えた。

そんなことも気にせず、彼女は言葉を発していく。

「慧を虐めるですって？ 冗談じゃないわ！ なんでウチがクラスの子を虐めなきゃいけないのよ。ウチをアンタ等みたいなクス野郎の仲間にしなさい！ 転校は何度もしてるから、初めての場所なんて慣れてるの。どう思われたって、全然気にしないわ。だから言わせてもらっけど、」

彼女の口から出てくる言葉は、大分すごいものが混じっている。それを自覚しているのだろうか。

周りはあまりの希薄に顔を青くしている。
そして、彼女は最後に、斉藤さんに向かって大きな声ではっきりと告げた。

「アンタみたいなクズ同然の人間と同じ空気を吸ってるってことが、
とっても不快で堪らないわね!!」

吐き気がするから、ウチに寄ってこないで。

私や斉藤さん、教室にいた子たちは、みんな信じられないような
ものを見る眼で彼女を見た。斉藤さんに至っては、顔面蒼白だった。
しかし、彼女はそんなことも気にせず、人を掻き分けて私のほう
に歩み寄ってきた。

少し警戒する私の腕を、彼女がとって教室の外へと引いていった。
教室から大分離れた場所で、彼女が止まる。私は、彼女の顔を伺
おうとした。

「慧っ!!」

「わっ!?!」

彼女が私に飛びついてきた。

何かと驚いている私に、彼女が笑いながら言った。

「中学校同じだった、慧よね!」

「ふえっ? あ、うん、えっと、やっぱり、香織ちゃん?」

「そうだよ! わあっ、また会えるなんて思ってた! 嬉し
いっ!」

そう言いながら香織ちゃんは私の手を取った。

私は、それに驚きつつ彼女を見る。

「また仲良くしようね!」

にこり、と満面の笑みを浮かべる香織ちゃんを見て、私は嬉しくなった。

ああ、温かい。

同じ年の子にこうして手を取ってもらえたのは、何年ぶりだろうか。

そう思いながら、私は彼女に笑い返した。

「うん」

17・朝のできごと

先日、中学校のときに仲が良かった香織ちゃんが転校してきた。

彼女は負けん気が強くて、威勢がよくて、とっても明るい元気な子だ。そう、それはもう、私なんかと仲良くしているのがもったいないほど。

そんな彼女は、転校初日、斉藤さんにキツイ一言をかました。私をかばったのだ。嬉しかったけど、正直、彼女には迷惑をかけたと思う。私のせいで、香織ちゃんまで虐められたらどうしよう。私の胸の中は、そんな気持ちでいっぱいだった。

けれど。

キツイ一言を言った後、彼女は遠巻きにされていた。でも彼女は彼女を避けていた子たちに普通に接した。まるで、避けられていないように。

そんな彼女の人柄は、たちまち、人を惹きつけた。虐めなんて、起こらなかった。

よかった。

私は、とても安心した。私のせいで彼女まで虐められてしまったらなんて、そんな心配は余計だった。私は、今の自分のことだけでも精一杯なんだから、人の心配なんてしてられないのだ。

でも、香織ちゃんのおかげで、私に声をかけてくれる人が増えた。相変わらずの人もいるけど、そんなのはもう、あまり気にならなくなった。

そんなある日。

途中で行き会った香織ちゃんと登校していると、後ろから声をかけられた。

「慧ちゃん、おはようっ!」

久々に聞いた声に、嬉しくなって振り返る私。そこには、初鹿野先輩たちがいた。

「おっ、おはようございますっ」

「あ、右腕のギブス取れたの? よかったじゃない!」

そう笑いながら言うてくる初鹿野先輩の笑みは、前のような冷たさはなかった。

それに、少し安心する私と。

「その子、転校生だろ?」

今まで初鹿野先輩の後ろで、^く櫛先輩と気まずそうにしていた高峰先輩が、香織ちゃんのほうを見ながら言った。

それに、香織ちゃんが物怖じせずに笑いながら言った。

「はじめまして、山本 香織です! 慧とは、中学校が同じでした! よろしくお願いします!」

「元気な子ね。そういう子は好きよ。もちろん、慧ちゃんみたいに清楚で大人しい子も好きけどね!」

そう言いながら私の頭を撫でてくる初鹿野先輩。その言葉に、私は顔が熱くなる。

「あたしは2年1組の初鹿野 涼よ。よろしくね、香織ちゃん」

「はい!」

数分もせずに親しげに話す二人を見て、この二人は似ているなあ、と思った。

「ほら、アンタらもそんなシケたツラしてないで自己紹介しなさい

よ」

「？先輩たち、喧嘩してるんですか？」

キョトンとする香織ちゃんに、初鹿野先輩が肩をすくめて言った。

「喧嘩ではないと思うけど、軽く修羅場ね」

「はあッ！？」

初鹿野先輩の発した言葉に、高峰先輩と櫛先輩が同時に声をあげる。

「しゅ、修羅場じゃねえよ！なあ、瑞紀！」

「お、おう！全然全く何が修羅場なんだよ！初鹿野は相変わらず意味不明だな、高峰！」

動揺しまくっている二人を見て、初鹿野先輩は顔を背けて必死に笑いを堪えている。

香織ちゃんは少し困った顔をしながら私を見てきた。

そんな香織ちゃんに、私は二人のことを話した。

「えっと、香織ちゃん。この人たちは、高峰 響平先輩と、櫛 瑞紀先輩。初鹿野先輩と同じクラスだよ」

「ふーん……」

私の話を聞いてから、香織ちゃんが二人ににじり寄っていく。二人は一歩後退して香織ちゃんを見る。

数秒間の沈黙の後、香織ちゃんが口を開いた。

「先輩たちって、慧のこと好きなんですか？」

その言葉を聞いて、私はフリーズしてしまった。

今日の前にいるこの子は、一体何を言っているのだろう。

我に返った私は、慌てて香織ちゃんに言う。

「かつ、香織ちゃんっ、な、ななな何言ってるのっ！？先輩たちが、私のこと、す、すすすす好きなんて、あっ、あああるわけないよ！」

「わかんないじゃーんっ。さっき初鹿野先輩が言ってたことと、先輩たちの表情見れば少しは疑っちゃうもん。で、どうなんですかっ！」

香織ちゃんは、更に楽しそうに先輩たちに問う。

先輩たちはといえば、引きつった顔をしながら、香織ちゃんから逃げようとしていた。

そこに、初鹿野先輩が助け舟を出す。

「香織ちゃん、それぐらいにしてあげなさいよ。二人が可哀想じゃない」

初鹿野先輩の言葉を聞いて、高峰先輩と櫛先輩が「初鹿野…っ！」と感動していた。

私は失礼ながら、初鹿野先輩が二人に助け舟を出すなんて、珍しいな、と思った。別に、彼女がそんな冷たい人だとは思っていない。ただ、二人には冷たい感じだからと思ったただけだ。

と、初鹿野先輩は続けて言う。

「後で二人のことはたっぷり教えてあげるから」

「「おい!!」」

……、やっぱり、先輩は変わっていないかった。結局、中身はそんな感じなのだ。

香織ちゃんは、それを聞いて喜んでいる。

私は思った。

この二人、似てるなあ……………。

楽しそうに話を始める二人の背中を見ながら、私はぼーっとして

いた。

後ろで櫛先輩と高峰先輩が顔を真っ赤にしてボソボソと何か言っていたが、それはたぶん、気にしなくてもいいものだろう。

（あの転校生、三神の友達にしては豪快だったな……）

（いや、危険だ……。豪快なんてもんじゃない）

（（はぁ……））

18・可笑しな先輩

九月。たとえ暦上で秋だろうと、やっぱりまだ暑い。真昼の日差しは弱まることを知らず、大地を焼く。

私は、今日も今日とでパシられていた。それはまあ、香織ちゃんが来てからというもの、私をいじめたりパシリにする人は減った。それでも、彼女がいなくて私を使う人も、虐める人もいる。運動神経も良くて、勉強もできて、歌もうまくて、手先も器用で、目も耳もいい彼女だけど、目の届かない範囲だつてある。

けれど、その虐めだつて、以前よりとてもマシなものになった。やられたつて、影で悪口を言われたり、パシリにされるくらいだ。

それはたぶん、初鹿野先輩のおかげだろう。あの威圧で、派手ないじめをしようなんて思う人は減ったんだ。

私は、あの子の先輩の眼を思い出してゾツとした。

驚くほど冷たい視線。

初鹿野先輩は、謎めいた人だ。頭は良いのだろうけど、詳しい情報はどこにも出回っていない。

私たち一年の間では、あの発言から、初鹿野先輩は裏で恐ろしいことをしている人だという噂が流れている。

でも、あんなに良い人なのだから、そんなことはないだろう。…

……きつと。

私だつて、あの人のことを詳しく知っているわけではない。だから、彼女を完全に良い人とはいえない。

一体あの人は、どんな人なんだろう……？

そんなことを思いながら廊下を歩いていると、自分の足に足がつ

つかかった。そのせいで足を踏み出すことができず、私は持っていたものをぎゅっと強く抱いて、衝撃に備えたが。

前のめりに転んだら絶対に来るであろう衝撃が来なかった。私はそれに呆然としてしまつて、しばらく動くことができなかった。そんなときに、聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「この間抜け。お前は何してんだ」

それにハツとして、私は振り返る。

そこには、私の腕を掴んでいる櫛先輩がいた。

櫛^{くみづき} 瑞紀先輩。二年生で、バスケット部に所属している。この先輩は、頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群という、何から何までパーフェクトな人だ。性格は良いほうなのかわからないが、口が大分悪く、若干荒っぽい性格らしい。しかし、逆にそこがいらしく、とてもモテる。根は優しいことは、私もよく知っている。けれど、私はこの先輩が嫌いだ。

なぜか。そんなのは簡単だ。

櫛先輩は私が嫌いだからだ。

櫛先輩は、豪快な人だ。簡単に言えば、私とは正反対の人なのだ。人によつては異なるだろうけれど、人間という生き物は自分とは違う人に惹かれるらしい。けれど、私は違うのだ。

この人は、私に面と向かつて嫌いと言ってきた。それも、はつきりと。そこは問題ないのだ。

私が気に入らないのは、人それぞれの性格で、それには治るもの治らないものがあるのに、それを彼が否定したということだ。

彼に悪気があるわけではないことはわかっている。けれど、彼のあの言い草には腹が立った。

とにかく、私は彼を好いていない。

そんな先輩が、なぜ私の腕を掴んでいるのか。

私が状況を全く把握できていないしていると、梶先輩は私の腕を放した。それに、梶先輩が助けてくれたということに今更気づく。

梶先輩のほうを見ると、彼は眉根を寄せて溜息を吐いてからこう言ってきた。

「今日も相変わらずパシリにされて、その上自分の足に足がからまって転びそうになったなんて、お前は相変わらず抜けてるな」

その言葉に力チンときた私は、今日は珍しく彼に言い返した。いつもならここでわたわたするが、今日は違うということを思い知らせてやる。

「……………ま、間抜けな人に間抜けだなんて、い、言われたくありません」

「は？」

「私、その、み、見てましたよ」

「……………何をだ」

「せ、先輩、今日の体育でばーっとして顔にサッカーボール当たってましたよね……………」

私の言葉に、梶先輩がいかにも「げ、っ」とでも言いたげな顔をした。その顔の右頬にはガーゼが貼っており、何箇所かカットバンも貼ってある。

「な、なんで知ってたんだよ……………」

「授業のとき、外見てたら、た、たまたまそこが見えたんです……………」
そう。数学の授業のときに、先生の余計な長話が始まったので退屈凌ぎのために外を見たら、たまたまそれが見えたのだ。

思わず笑いそうになってしまい慌てて目をそらしたが、運動神経抜群の先輩がそんなふうになるなんて面白いな、と思った。

私が言えば、先輩は大きな溜息を吐いた。

それから、私に顔を近づけて、小声で言ってきた。

「そ、そのこと、黙ってるよ……」

たぶん、恥ずかしかったのだろう。運動神経抜群なんて言われているのに、顔面にサッカーボールが当たるなんて。私でもないミスだ。

私は、櫛先輩に頷いた。それから、彼に言ってみた。

「わ、私は言いませんけど、その、先輩人気だし、そんなこと、あつという間に先輩のクラスの女の子たちが広めてしまうと思いますよ……？」

それに、先輩が「そうだった」とショックを受けて、肩を落とした。

そんな先輩を見て、少し可笑しく思う。

堪え切れなかった笑いが、私の口から漏れる。

その声を聞いて、先輩が私を睨んできた。それでも、顔が赤いせいであまり迫力はなかった。

「……笑ってんじゃねえよ」

「す、すいません……っ。で、でも、こんな先輩はあんまり見ないんで、その、可笑しくて……っ」

笑い出すとなかなか止まらず、私はその場で笑っていた。

と、櫛先輩が黙り込んでしまったことに気づいて、顔を上げてみる。

そこには、私のことを凝視している先輩がいた。

なんだろうと思って、先輩に声をかける。

「あ、あの、先輩………？」

もしかして、怒っているのだろうか？

そんなことを思っしまい、一気にいつもどおりに戻る私。

怒鳴られるかもしれないと思っていて、先輩の口からは意外な言葉が出てきた。

「お前、いつもそうやって笑ってるよ……」

「へ？」

「……、っ、あ、いや、なっ、なんでもねえよ！ も、もう授業始まるから、俺行く！」

「えっ、あの、せっ、先輩！？」

慌ててそう言って、先輩は行ってしまった。

私はただ呆然とそこに立ち尽くすだけだった。

可笑しな先輩。

（俺は一体何を言ってるんだよ……！）

18・可笑しな先輩（後書き）

なんか季節感統一してなくてすいません；

19・文化祭のこと

「あつぢー……」

俺たちは今、屋上のちょうど日陰になっている場所に陣取って、昼休みを過ごしている。

九月と言っても、まだ上旬。八月の気温と大差はない。逆に言ってしまうと、この季節で涼しい地域なんて、北海道ぐらいだ。

そんなことを踏まえてか知らないが、高峰がグツタリしながら言葉が漏らす。

確かに暑い。真夏の気温だ。

かく言う俺も、この暑さには参っている。弁当さえ食う気にならない。一緒に弁当を食べている三神と山本もあまり食が進んでいない。

が、そんな俺たちを尻目に一人だけ平然とおかしな本を読んでいる奴が一人。

「暑い、暑いなんて言ってたって、涼しくならないわよー」

そう、初鹿野だ。

なんでコイツは汗ひとつかいていないんだ……！？

「お前は暑くねえのかよ！」

すかさず高峰がつっこむ。

その質問に、初鹿野が本から目を離さず答える。

「暑いわよ。こんな気温で暑くないっていうほどあたしは狂っちゃいないわ」

「うそつけ」

「なんか言った？」

「何でもないです」

初鹿野の言葉に、小声で高峰が呟く。それを聞いて、初鹿野が圧をかける。

まあ、高峰の気持ちもわからないでもない。もともと初鹿野は狂っているのだ。

そんなことを思っていると、初鹿野の強烈なパンチが俺の顔面にヒットした。

「いてえな！ 何すんだデメエ！」

「アンタが変なこと考えてるからでしょ。顔に出てるわよ」
しまった。俺はそんなに考えていることが顔に出やすいのか。

マズイマズイ。これはどうにかしなければ。

そんなことを考えていると、ふと、初鹿野が言葉をもらった。

「そういえば、そろそろ文化祭のシーズンね」

「あ？」

急で一瞬理解できなかったが、すぐになんのことかわかった。
高峰もわかったようで、話に乗ってくる。

「ああ。もう九月だしな」

「そうだな。早いもんだなあ」

「今年もなんか面白いことないかしらねえ」

と、盛り上がる俺たちの横で、きょとんとしている一年二人に気づいて、初鹿野が説明をする。

「あのね、ここの学校は、九月の後半に文化祭があるのよ。それで、この時期になるとそろそろ準備が始まるのよ」

そう。

俺の学校はこの時期になると文化祭の準備を始める。生徒会を中心に、各クラス出し物を決めたり、それぞれの委員会を決めたり。とにかく忙しくなるのだ。

「ま、文化祭の準備のことは措いとして。ここの高校の文化祭は、まあどこにでもあるような文化祭なんだけどね。期間は四日間。日ごとに大きなイベントがあるのよ。一日目は、開会式。二日目は、軽音楽部のコンサート。三日目は、アクロバットコンテスト。でっ、四日目は閉会式と後夜祭ね。あたしの一押しはアクロバットコンテストなんだけど、やっぱり一番盛り上がるのは後夜祭かしら」

初鹿野の話を聞いて驚く三神と山本。まあ、アクロバットコンテストなんてものに驚かない奴はいないだろう。この学校は、平均より身体能力が高い。故に、そんなものまで校長が作り出してしまったのだ。まあ、アクロバットコンテストは希望者だけが参加だが。

「毎年すごいわよー。大勢の人が来てねー。とっても盛り上がるのよ」

「ま、後片付けは大変だけどな」

「なんで後の話すんだよ、テメエは」

「そうよ、余計なこと言うんじゃないわよバカ峰」

空気を読まない高峰を小突く。

「へえーっ！　なんか凄そうですね！　楽しみだなあっ。ねっ、慧！」

「ふえっ！？　そ、そうかな……？」

文化祭のことを聞いて興奮する山本。それとは逆に、三神の反応はパットしないものだった。

そんな三神に、山本が言う。

「まあ、慧は大勢でやることとか苦手だもんねー。人見知り激しいし」

「接客担当にさえならなきゃいいわよ」

初鹿野の言葉を聞いて、三神が困り顔をしながら頷く。

と、昼休み終了のチャイムが鳴った。それを聞いて、屋上にいる生徒は一斉に移動し始める。

「俺たちもそろそろ行こうぜ」

「あー……、五時限目古典かよー…、最悪」

「ま、高峰は確実に当てられる席だしね。古典、アンタの苦手教科でしょ」

「ああ、そうだよ。もう、なんで教卓の真ん前なんかになっちゃまったんだよ……！」

一気に暗くなる高峰の背中を叩いてやる。ああ、哀れな高峰。

「私たちも、行こっか……」

「そうだね。五時限目なんだったつけ？」

「えっと、たぶん、英語……？」

「あー、億劫。寝ちゃおうかなー」

一年二人組みも、重いからだを動かして移動を始める。

文化祭か……。

このとき、俺はよくわからないが嫌な予感がしてたまらなかった。

そして、それは見事に的中してしまうのだった。

19・文化祭のこと（後書き）

最近更新おろそかでスイマセン；

20・出し物

「ってことで、学園祭の出し物の案がある人はいませんか？」

クラス委員長がクラス全体に声をかける。

黒板には大きく、『学園祭出し物案』と書いてある。

委員長の言葉を聞くなり、今までうずうずしていた生徒たちが一斉におしゃべりを始める。

とつさに、委員長は「静かに！」と声を張り上げる。

私はそんなのを見ながらボンヤリしていた。

学園祭は、みんなが楽しめるからいいと思う。みんなが楽しめるなら、私はそれでかまわない。

だけど、その輪の中に入ろうとは思わない。

大勢は嫌いだ。賑やかなのも、うるさいのも。一人のほうが好き。

正直なところ、学園祭は憂鬱なのだ。だから、出し物なんてどうでもよかった。

私がそんなことを思っているうちに、出し物についての意見が出ていた。

黒板には、案が4つほど書いてある。

手作り小物店、喫茶店、射的、推理ゲーム。

なんだか定番のものばかりだなあ、なんて思っていると、委員長

が誰かを指した。それから、聞き慣れた声が楽しそうに言う。

「シンデレラの劇がやりたいです！」

そちらを見れば、私の唯一と言ってもいいほどの友人、香織ちゃんがいた。

香織ちゃんの言葉に、みんながまた騒がしくなる。

委員長がまた注意する。

静かになつてから、委員長が言う。

「とりあえず、第一から第三までの候補を決めます」

多数決の結果、第一が劇、第二が喫茶店、第三が射的になった。

何になつても、私には関係ないだろう。

そんな考えは、すぐに切り捨てられることになるのだが。

「最悪だよ……っ、！」

「く、梶先輩……？」

「ああ、気にしないでね、慧ちゃん」

「瑞紀もそんなに落ち込むなよー」

昼休み。いつものように屋上に行くと、櫛先輩たちが先にお弁当を食べていた。そこまではいつもどおりだった。ただ、違ったのは、櫛先輩がやたらと暗い雰囲気をしょっているということだ。

「櫛ったら、文化祭の出し物でこんなに落ち込んでるのよ？ 有り得ないわよね、ホント」

「本当だよ。うらやましいことこの上ねえよ」

先輩たちがそんな会話をしているので、私は聞いてみた。

「あ、あの、先輩たちの出し物って、なんですか…？」

「あたしたちのクラスはね、第一候補が執事喫茶なのよ。無難ですよ？」

執事喫茶なら、全然楽しいのだろうか？

そんなことを思っていると、香織ちゃんが言った。

「あっ、わかりました！ 櫛先輩、執事の格好したくないんですよ！ 女子が群がるから！」

その言葉に、櫛先輩がいつそう暗くなる。おそらく凶星なのだろう。

それを見て笑いながら、初鹿野先輩が頷いた。

「そういうこと。コイツ、ソレが嫌で猛反対してたのよ、一人で」

「でもよお、そんなに嫌がるか、普通？ 男だったら喜ぶべきところだろ」

贅沢なヤツめ、とでも言いたげな高峰先輩の言葉に、櫛先輩が口を開いた。

「……ねちっこいんだよ、ああいうのは。だから嫌なんだ」

それから、大きな溜息をひとつ吐く。

まあ、たしかにそうだろう。櫛先輩はモテるから、当然女子が群がってくる。それはしつこいだろう。

「高峰たちみたいな貧相な男子は、櫛のお零れをもらえるかどうかだものねえ」

クツクツと喉の奥で笑いながら初鹿野先輩が言う。

「貧相とはなんだ、貧相とは！俺だって並の顔立ちだぞ！」

「まあ、高峰先輩は平凡な顔つきですよー」

そんな高峰先輩に、香織ちゃんが言う。それを聞いて、高峰先輩が落ち込んでしまった。

「ま、そのとおりね。落ち込むことないわよ、高峰。アンタの顔なんて、誰も気にしてないから」

初鹿野先輩の言葉に、さらに落ち込む高峰先輩。

「ところで、慧ちゃんたちは何する予定？」

暗い雰囲気男子二人を無視しながら、初鹿野先輩が聞いてきた。

「うちのクラスは、シンデレラの劇ですよ」

「へえ、シンデレラねえ」

そう言うことから、初鹿野先輩が私のほうを向く。

それから、ニヤリと口の端を上げながら言った。

「やっぱり、シンデレラの役は慧ちゃんがふさわしいんじゃないかしら？」

それを聞いて、いつの間にか復活していた高峰先輩が頷いた。

「三神は健気だしな。シンデレラだろ、実際」

その言葉に、私は勢いよく首を横に振る。

シンデレラなんて、とんでもない。私はただ、弱虫で口が利けなくて、パシリにされているだけなのだ。

そう思っているところに、櫛先輩が入ってきた。

「弱気のコイツに、主役はムリだろ」

声とかちっせえし。

それを聞いて、初鹿野先輩のグーが櫛先輩の後頭部にクリーンヒ

ツトした。わけのわからない声をあげながら、櫛先輩がうずくまる。そんな櫛先輩を、更に高峰先輩が蹴る。

「アンタ、慧ちゃんに主役はムリとか、いつ決まったの！ ていうか、意地張ってないでピタリって言いなさいよ！」

「そうだぞ、瑞紀！ 三神こそシンデレラのはまり役だぞ！ 弱気とか関係ねえよ！」

「うるせえよ！ 本当のこと言っただけだろが！ じゃあ、三神はシンデレラやりてえのかよ！ まずそこだろうが！」

その言葉に、初鹿野先輩たちが手を止める。それから、こつちを見て「どう？」なんていう顔をしてきた。

「え、その、えっと、私は、そ、そんな、主役なんて、いい、です……っ」

というか、やる気ないです。

ぼそっと、心の中で呟く。

なぜか重くなってしまった空気。それを打ち破ったのは、香織ちゃんだった。

「まあ、シンデレラの役は誰だっていいんですよ！ 可愛ければ！ とりあえず、もう時間なんで行きましょう！ 慧、行こ」

香織ちゃんが、私の手を引く。私は、三人の先輩たちを背に香織ちゃんに連れて行かれた。

「でも、慧ちゃんがシンデレラの役を本当にやったら、可愛いと思

わない？」

「絶対可愛いよな。なあ、瑞紀」

「……………そうだ、っそ、そうでもないだろ」

（今頷きかけたな、コイツ）

21・配役

出し物の話し合いから三日後、各クラスの出し物が決定した。

私たちのクラスは結局シンデレラの劇になった。

中には内容が似ているようなところがあつたらしく、決めるのが大変だったようだ。

私たちのクラス以外にも劇をやるクラスがいくつかあるようで、公演の日にちを決めなければいけないらしい。

出し物が決まると、やることがどつと増える。

私たちのクラスの場合は、劇の配役、裏方の配役、衣装作り、脚本作成、小道具・大道具の作成。それぞれの係りも決めなければ、仕事が効率よく捗らないだろう。

文化祭の用意もあり、今日から授業は午前中のみになり、午後は文化祭の準備だ。初鹿野先輩曰く、うちの学校は本番までの準備期間が短いらしく、そのかわり午後の授業は潰すらしい。授業の時間が少なくなるので、変わりに課題が大量に出るけど。

そんなんで、今は午後だ。時間というのはあつという間に経ってしまう。私は、この時間がとても嫌だったのだ。

今日は劇の配役や係りを決めてから色々するらしい。

嫌だなあ、なんて思いながら、黒板に書いてある人物の配役を見

た。

王子や家来、魔法使い、いじわるな姉二人の役は決まったらしい。『いじわるな姉¹』の下に香織ちゃんの名前が書いてあってビックリした。

でも、継母と肝心なシンデレラの役が埋まっていなかった。主役が決まらなければ、ことが進まない。

周りの状況を把握するために、教室を見渡してみた。委員長の保坂さんを見ると、困った顔をしていた。

「どうしよう。シンデレラの役、誰かやってくれない？ あと継母も」

シンデレラの役は、たぶん女子が物怖じして立候補しないのだろう。継母は、さすがに進んでやる子はそんなにいないと思うけど。

そう思っていると、誰かが手を上げたようで、保坂さんがパッと顔を明るくした。

さされた人は、一言言った。

「シンデレラ役は、玉野さんがいいとピッタリだと思います！」

一斉に、みんなが玉野さんを見る。

玉野 優子さん。私は彼女のことをよく知らないけど、彼女は可愛い。小柄で愛らしい顔をしていて、明るくて。

とても、優しい子だ。

玉野さんのことをよく知らないと言ったが、私は少なからず彼女と関わったことがあった。

会えば少しだけ話もする。

玉野さんは、私のことを差別しなかった。

そんな彼女は、クラスでも一目置かれていた。可愛くて、頭もそれなりにいいし、運動だっているんな場面で活躍していて。私とは正反対の人だ。

一人の言葉が広まって、それに大勢の人が賛成した。盛り上がる中で、一人だけは違った。

斉藤さんだ。

彼女は、思い切り嫌そうな顔で玉野さんのほうを見ていた。たぶん、斉藤さんはシンデレラをやリたかったのだろう。たぶん、ムリだったと思うけど。

残るは継母役。

立候補する子がいるはずもなく。

教室が嫌な空気になりつつあるとき。
不快な声が静寂を破った。

「継母役、アタシがやります」

声がしたほうを見ると、斉藤さんがいた。
ものすごい満面の笑みで。

みんなが哑然としていたが、保坂さんは「ありがとう、斉藤さん！」と言って話を進め始めた。

斉藤さんが満面の笑みで、あんな役を引き受けるなんてあれは、何か悪いことを企んでいる顔だ。

私はなんとなく、玉野さんのことが心配になった。

21・配役（後書き）

委員長の名前

保坂 友子^{ともこ}

性格はいたって真面目で、頭は学年10位の中に入ってる。
テキパキ働く。まさに委員長って感じの委員長。

こんなところで公表しちゃう委員長のこと。私は一体何がしたいんだろう（・ー・）

22・ 昼食時の話題

「で、結局シンデレラの役は慧ちゃんじゃないってこと」

劇の配役をした日の翌日の昼休み。

いつものメンバーでいつものように昼食をとっていた。
話題はやっぱり文化祭のことになった。

「シンデレラの役は誰になったんだ？」と高峰先輩が聞いてきたので、香織ちゃんが答えると、初鹿野先輩が冒頭の一言を言った。

高峰先輩と初鹿野先輩は残念そうな顔をしていたが、梶先輩はど
うでもいいと言わんばかりにお弁当を黙々と食べていた。

「それで、慧ちゃんは小物づくりの係りになったわけね」

「あ、はい」

「慧は手先が器用だから、ちょうどいいわよね！」

「うん」

私は表で何かをするより、見えないところで努力をしていたほうが気が楽だし、自分でも向いていると思う。表で頑張って空振りするより、全然マシだ。

「で、山本は何をするんだ？」

高峰先輩の問いに、香織ちゃんが自信満々に答えた。

「意地悪な姉の一人です！」

それを聞くなり、高峰先輩と櫛先輩が口の中に入っていたものを噴き出す。そんな二人の頭を、初鹿野先輩が凄い勢いで叩いた。

「きつたないわねえ、アンタたち！ 女子の前でそんなことするなんて、最悪よ！ 慧ちゃんや香織ちゃんに飛んだらどうすんの！」

例の如く、高峰先輩と櫛先輩は頭を押さえながらうめき声を上げる。

「あたしに飛ばしたらこんなじゃ済まさないわよ」

その一言に、二人の顔がサアッと青ざめていく。どんなことをされるのかわからないが、そんなに青くなるまで酷いことをされるようだ。初鹿野先輩ならしかねないかも、などと思った。

「まったく。ごめんね、慧ちゃん、香織ちゃん。こいつらは後でまたボコボコにしておくから！」

爽やかな笑みを浮かべながら、初鹿野先輩は恐ろしいことを口にした。明日、高峰先輩と櫛先輩が痣だらけになっていないことを願おう。

「あ、あの、先輩たちは、喫茶店をすることになったんですか……？」

ふと思い出して、初鹿野先輩に聞いてみる。

すると、初鹿野先輩の隣でうずくまっていた櫛先輩の周りの空気が一気に暗くなった。それを見て、一瞬まじいと思った。

が、そんな櫛先輩を知ってか知らずか、初鹿野先輩と高峰先輩がニヤッと笑ってうなずいた。

「そつ。似たような出し物のところがあつたんだけど、みんなうちのクラスに譲ってくれたのよ」

「櫛がいるからな、うちのクラス」

高峰先輩の言葉で、大抵予想がついた。

「各クラスの委員長に女子が何人かいたんだけど、うちのクラスの提案を聞いた瞬間、すごい剣幕で『それでいいです』って連呼したんだつて。流石に、うちのクラスの委員長も引いてたけどねー」

「ま、どちらにしる決まったからいいじゃねえか」

「昨日の係り決めるときはすごかつたんだよ。初鹿野以外の女子全員が声そろえて『櫛くんは接客で決まり！』なんて言つたもんだから、俺たちが反抗なんてできたもんじゃない。ま、賛成だったけどな」

櫛以外は。

一言付け加える高峰先輩の視線の先には、落ち込んでいる櫛先輩の姿があつた。

でも、確かに櫛先輩が接客をすればお客さんが集まるだろう。主に、女性客が。

そんなことを思っていると、香織ちゃんが櫛先輩に言つた。

「櫛先輩も、そんなに落ち込むことないじゃないですか。ちよつと疲れるだけですよ」

それに、櫛先輩が疲れたような顔を上げて言つた。

「お前にはわかんねえよ……。あの女たちの恐ろしさが……！」

そんな梶先輩に、初鹿野先輩が背中を強く叩いて言った。

「馬鹿ねえ、梶。怖いとかヘタレてんじゃないわよ！ そんなん、適当に受け流せばいいのよ」

すごい力で叩かれたらしく、梶先輩が咳き込んでいる。

それを見ながら、高峰先輩が苦笑する。

「まあ、お前はできるだろうけどな。同じ女子だし、受け流し方のパターンも豊富にもってそうだし」

「んー、そうね。じゃあ、私が接客練習のときにアドバイスしてあげるわよ。」

軽く言う初鹿野先輩。

そこに、香織ちゃんが聞いた。

「初鹿野先輩と高峰先輩は、なんの係りなんですか？」

「俺は、美化係だ。ゴミの収集と片付け」

高峰先輩が言い終わると、初鹿野先輩が口を開いた。

その口からは、以外なような、そうでもないような答えが出てきた。

「あたしは、接客よ。執事の格好して」

「えっ、ほ、ほんとうですか……っ？」

驚きのあまり、思ったことが口から出てしまった。

「そ。なんでもいいって言ったら、なんかそうだったのよね」

「コイツ、授業中にも関わらず、普通に変な本読んでたんだぜ。最悪だよな」

高峰先輩の言葉を聞いて、初鹿野先輩が「なんですって？」と胸倉をつかんだ。

「い、いえ、なんでもないです…っ、」

「よろしい」

「ぐえっ」

初鹿野先輩が急に手を放して、変な声をあげる高峰先輩。

「でも、初鹿野先輩ならとっても似合いそうですね！　かつこいいですよ、絶対！」

「そう？　まあ、お菓子とか盛り付けるよりは全然楽よね」

初鹿野先輩らしい言葉に、思わず笑ってしまう。

と、そんなところに午後の文化祭準備活動開始五分前のチャイムが鳴った。

屋上にいた生徒たちが慌てて戻っていくのを見つつ、私たちも片づけをはじめた。

「あー、ダリイ。文化祭準備かー…」

「俺、教室行きたくねえ……………」

「何ヘタレてんのよ。頑張りなさい」

そんな先輩たちのやり取りを見ると、初鹿野先輩と目が合った。

それから、先輩に言われた。

「慧ちゃん、頑張つてね。大丈夫。困ったら、あたしたちに相談してくれればいいから」

急にそんなことを言われて呆気にとられてしまったが、すぐになんのことかわかり、私はうなずいた。

23・加々美くん

賑やかな教室。

委員長の保坂さんが声を張り上げないと指示が通らないくらい騒がしい。

舞台に立つ人たちは演技の練習。

衣装を作る人たちは裁縫。

大道具を作る人たちは大変な作業。

私は、そんな人たちを見ながら小道具を作っていた。

小道具の係りは少ない。私を含めて四人だ。そのほかは、大道具と衣装作りにまわっている。

まあ、小道具にそんなに人数がいても困るだろう。四人ぐらいが丁度いいのかもしれない。

今私の手の中にあるのは、シンデレラのガラスの靴だ。

もちろん、ガラスではできていない。靴はハイヒールの白のものを、派手すぎずに、それでも煌びやかに見えるように小さなビーズのアクセサリーをつけた。ワンポイントにすれば、それで十分だろ

う。

自分でいうのもなんだけれど、私は手先が器用なほうだ。普段から料理もしなければならぬ身であるので、手先が器用でないと困るのだ。

だから、私は小道具係で十分だった。はっきり言うと、こういう地味な作業のほうが好きだ。

わりかし上手くできた靴を見て、私は思わず、にっこりと笑ってしまった。普段あまり笑わないので、こんなことは珍しいと自分で思う。

ふと、こちらに視線を感じた。

視線を感じたほうを見ると、私の前に座っていた加々美くんが私のほうをじつと見ていた。

それに驚いて、慌てていつもの表情に戻る。

「なっ、なに……っ？」

私の質問に、今度は加々美くんが慌てて答える。

「い、いやっ、なんでも、っない！　そ、それより、上手いね、それ」

徐々に小さくなっていく声とともに、おずおずと出てきた人差し指がさす先には、私の手の内にある靴だった。

彼の言葉に、私は言う。

「そ、そんなこと、ないよ……っ。私、何もできない、から……。せめて、これぐらいのことはしないと……、ね……」

そう。私には、これぐらいしかできない。

自分で言っているにも、惨めになってくる。いじめられていて、こんな場面でも大きな役に立てないなんて。

なんて私は惨めなんだろう。

いつそのこと、消えてなくなってしまうばいいのに。

そんなことを思いながら俯いていると、加々美くんは、弱いけれどやけにはつきりとした声で言った。

「何もできないなんて、僕は、違うと思うな…。僕、あんまり学校来れないから、よくわかんないけど…。僕がいつも見る三神さんは、気が利く三神さんなんだ」

それを聞いて、私は驚いて顔を上げた。

加々美くんを見ると、優しく笑っていた。

その目は長めの前髪で隙間からしか見えなかったが、馬鹿になどしていなかった。

体が弱い彼は、学校にあまり来れていない。私も、あまり加々美くんのことを気にしていなかった。自分のことで精一杯だったから、彼のことなど眼中になかったのだ。

なのに、彼は私を見ていた。

いじめられていて、惨めな私を、香織ちゃんや初鹿野先輩たちと同じ視点で。

周りの子達とは、別の視点で。

私は、霞んできた視界に気づいて、下を向く。それから、目をぎゅゅとつぶった。

涙が零れてしまわないように、強く。

こんなことで泣いているなんて、呆れられるだろう。でも、私には彼の優しさが嬉しかった。

なんとか涙を堪えて、向き直る。

それから、上手く笑えていないかもしれない顔で言った。

「
ありがとう」

そう言った私に、加々美くんは笑った。

「
うん」

なんとなくけれど、彼とは気が合う気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8386t/>

先輩なんて大嫌い。

2011年12月7日12時51分発行